

京都大学 教育学部紀要

III

美の教育的機能 第一部	高坂 正顕
社会性発達テストの因子構成	倉石 精一
総合目録の思想と現代の課題	小倉 親雄
特集 教育学について	共同執筆
教えられ得るものと学ばれ得るもの	笠尾 雅美
権威主義的パーソナリティと親子関係	遠山 順一
教育における自由と愛	岡本 道雄
遊戯療法の経験とその問題	畠瀬 稔
デューイとマルクス主義	稲葉 宏雄
逸脱行動と社会的統制に関する一考察	柴野 昌山
文献抄録	清水 俊彦 笈田 知義 富士貴志夫 藤本浩之輔
英文要約	編集 永井道雄 F. P. ハリス

京都大学教育学部紀要 Ⅲ

目 次

美の教育的機能 第一部	高坂正顕	1
社会性発達テストの因子構成	倉石精一	22
総合目録の思想と現代の課題	小倉親雄	42
特集 教育学について		67
危機と教育	鱒坂二夫	
教育の皮肉	池田進	
教育学について	梅本堯夫	
教育における発達主義	小田武	
教育学部論	相良惟一	
教育学の体系についての試案	下程勇吉	
教育の意味と機能	高瀬常男	
教育学部における教育研究と教職	永井道雄	
教育学における説明諸科学の位置づけ	森口兼二	
教育社会学の一つの問題点	重松俊明	
現代アメリカにおける教職教育の諸問題	F. P. ハリス	
人格性に就て	片岡仁志	
教えられ得るものと学ばれ得るもの	笠尾雅美	114
権威主義的パーソナリティと親子関係	遠山順一	124
教育における自由と愛	岡本道雄	139
遊戯療法の経験とその問題	畠瀬稔	149
デューイとマルクス主義	稲葉宏雄	167
逸脱行動と社会的統制に関する一考察	柴野昌山	180
文献抄録	清水俊彦・笈田知義・富士貴志夫・藤本浩之輔	191
京都大学教育学専攻卒業生著作目録		204
講義題目		212
修士論文および本科卒業論文		225
英文要約	編集 永井道雄・F. P. ハリス	230

特 集

教育学について

執 筆 者

修	坂	二	夫	重	松	俊	明
池	田		進	下	程	勇	吉
梅	本	堯	夫	高	瀬	常	男
小	田		武	永	井	道	雄
片	岡	仁	志	森	口	兼	二
相	良	惟	一	F. P.	ハ	リ	ス

文 献 抄 録

Simon 著 Administrative Behavior について

清 水 俊 彦

教育行政は教育を対象とする行政である。一般に administration なる語は種々の意味に使用されているが、その最も広い適用は政府やその他公共の、または私的な機関によって計画された policy を実現する全体的な技術 (art) としてである。すなわち、それは管理の技術である。business administration は経済的、商業上の計画を管理する技術であり、public administration は中央および地方における公共の政策を遂行する技術である。また、社会福祉に関係した政策の遂行に関しては social administration なる語が用いられる。教育行政も行政である以上、その活動は組織を通じての管理的活動であり、したがって、その理論的研究も制度的、法規的な考察に加えて、教育行政組織を通じてなされる教育行政の行動に関する考察をも含むべきであろう。この意味で、ここで略述する H. A. Simon の Administrative Behavior (1953) は教育行政の理論化のために何らかの示唆をあたえるのではなからうか。

著者 Simon (1916～) は、Public Management and the Municipal Year Book の副主筆 (1938～39)、カリフォルニア大学の「行政調査研究科」の主事 (1939～42)、および同教授 (1947～49) 等の経歴をもち、また U. S. Bureau of the Budget や Carnegie Institute of Technology 等に関係してきた政治社会学者である。現在は、Illinois Institute of Technology の政治学の教授である。著書には、ここで要約する Administrative Behavior 1947 の他に、Technique of Municipal Administration 1947 Local Planning Administration 1948 Public Administration 1950 等がある。(Who's who in America 1954, 1955 による)

「行政行動」と題する本書は、著者にとっては公行政の研究を続けていくための有用な方法を見出す意義をもっている。行政組織を明確に、効果的に記述するための適切な概念的方法は十分に研究されているとは云えない。いわゆる行政の「原理」を確立するまえに、行政組織を如何に解し、如何に運営するかということに関して正しく記述することが必要なのではなからうか。この記述を可能にするための著者の試みが本書においてなされるのであり、また彼の研究の結論の記録でもある。もちろん、行政の全体的な理論化をそこに見出すことは不可能ではあるが、Simon のなす主要な結論は decision-making は行政の核心であること、行政理論の用語は、人間の選択に関する論理と心理から求められるべきであること、の二点に帰することができよう。したがって、本書の各章は上述の結論に関係して、それぞれの観点から行政行動を論察したものである。

従来行政に関する論議においては、あらゆる行為の前提となる選択—すなわち、個々の実際的な行為ではなく、何がなされるべきかという決定—に対してはあまり注意されてこなかった。換言すれば、行政理論は process of decision と process of action の二者に同様に関係さるべきであるということは一般に認識されてはいなかったのである。行政の一般的理論は、それが効果的な活動を確保するような原理を含まねばならぬと同時に、正しい decision-making を確保する組織の原理をも含むべきであると主張する著者は、「決定行為と行政組織」と題する第1章において「選択の過程」を概観する。内容に関して述べれば、まず、決定行為と決定の執行の関係について記し、組織内で活動する職員を supervisory staff と operative staff の二者に分け、特に後者は組織の研究にとって重視さるべきであるとき

れる。また、あらゆる活動は特殊な行為の意識的無意識的な選択を含むものであるが、「選択と行動」の項では selection process について簡単に述べられている。行政組織内での個々人の活動は合目的、有意味的なものである。すなわち、それは一定の目的に指向されたものである。したがって、それぞれの決定は目標の選択を含むものであり、個々の活動は目標に関係するものである。「決定における価値と事実」の項では、Simon は決定には価値的な要素 (value element) と事実的要素 (factual element) とが含まれると説き、それらの意味、関係を決定の過程に関連づけて説明する。行政活動は集団活動であり、集団的な仕事に組織的な努力を可能にする技術が行政過程であるが、行政過程は決定の過程でもある。「行政過程における決定行為」の項では、行政過程の専門化—vertical specialization と horizontal specialization—と決定行為の関連性が考察され、また、専門化に関係して co-ordination, expertise, responsibility 等が説かれる。その他、組織にはたらく影響 (influence) の型に関する分析の項、および、何故に個人は自己の行動を組織の要求に適應させ、如何に個人の行動が組織行動の一部をなしているか等の問題を理解するために、個々人の動機と組織の目的との関係を述べた「組織の均衡」がある。組織に関係する個人の型は、企業家、顧客、従業員の種類に分けられるのであるが、これらの性格、役割をみることは、調和的な組織活動を推進させるために必要なことではあろう。若干の変容を認めるならば、この三つの型は公行政においても適用しようと Simon は云う。以上簡単に第1章の内容をみたのであるが、要するにそれは行政組織における選択の過程に関係してくる種々の要素の説明であり、行政理論に関する現代の文献に見出される、いわゆる行政の原理に対する著者の不満の結果として試みられたものである。したがって、第1章は序論的な意味をもち、第3章以下の各章においてなされる研究の枠組をあたえるものである。すなわち、本章で示された諸要素は各章において一層具体的に詳細に分析、記述されるのである。こ

こで本書の全体的な構成を簡単に述べることにしよう。第2章「行政理論の若干の問題」は第1章と同じく序論的なものであり、ここでは現代行政理論において原理とされているものが批判される。「決定行為における価値と事実」と題する第3章は、行政決定における value と fact の問題が論考され、そこから提起されてくる諸問題は第4章「行政行動における合理性」において更に概念的明確性を附与されて記述される。第5章「行政決定の心理」は組織における個人の心理および組織が個人の行動を変容する方法に関する考察であり、第6章「組織の均衡」では、組織は個人—彼の行動はある種の均衡を維持している—の一体系として把握される。第7章「権威の役割」では、組織における権威や専門化の果す役割が論じられ、また、専門化がなされていく組織の過程が詳細に分析される。つぎに第8章「コミュニケーション」は組織の influence が伝達するために必要なコミュニケーションの過程に関する考察であり、第9章「能率の基準」では能率の概念が詳しく考察され、第10章「忠誠と組織の同一化」では組織における忠誠あるいは同一化についてみられる。第11章「組織の分析」は、行政組織の構造の検討や行政理論の研究から導かれた諸問題と関連して組織の一般的な描写がなされる結びの章である。

すでに述べた如く、第2章は現代行政理論における原理に対する批判的考察がまずなされ、つぎに、如何にして行政行動の正しい理論は構成されるかに関して論議される。したがって、本章は後の各章に対する方法論的基礎を樹立する意味をもつものでもある。すなわち、現代行政の原理の致命的な欠点は、それら原理が諺の如く二つづつ組合わされてあらわれることであり、したがって人は殆んどの原理に対して同じようにもつともらしく、また承認されやすいが、しかし互いに矛盾している原理を見出さう。一対の二つの原理は、それぞれ全く反対の組織に関する勧告をなすものとはいえ、理論の中には、どの原理が適当なものであるかを示すものは存在しないと Simon は主張する。この批評をうらづけるために若干の

代表的な原理が簡単に考察される。たとえば、行政能率は分業によつて増進される、という原理がある。しかしながら、この原理は如何なる分業でもその促進は能率を増すことを意味するのであるうか。ここに二つの具体的な例をあげてみよう。

(A) 各地域ごとに一人ずつの保健婦を割当て、区域内のあらゆる保健に関する仕事を受け持たせる。(B) 区域には関係なく、仕事の種類(学校検診、結核診療等)に応じて異つた保健婦をおき、専門的に活動させる。上記の二者は分業の要求をみたすものであり、前者は場所による分業、後者は機能による分業である。これをみても解るように、分業の原理は二者の中からどれを選ぶべきかということに関しては全く役に立たない。分業の原理の簡明さは欺瞞的な簡明さ、すなわち、そのもつ根本的な曖昧さをかくすためのものであると Simon は批判する。しかし、彼は行政における分業に関して大略つぎの如く述べる。分業は能率的な行政の条件ではなく、あらゆる集団的な活動—その活動が如何に能率的、非能率的であろうとも—において不可避的な特質なのである。そして、同時に、同じ場所で、同一のことをなすことは二人の人にとつて物理的に不可能であるから、二人の人は常に異つたことをなすのである。したがつて、行政の真の問題は単に分業することではなく、特殊な情況に応じた、行政能率を高めるような特殊な方法で分業することである。問題は具体的方法なのである。これと同様な方法で、他の若干の原理—行政能率は命令系統の単一化によつて増進される。行政能率は統制範囲(span of control)を限定することによつて高められる。行政能率は目的、手つづき、場所等にしたがつて職員を分類することによつて増進される—が批判される。これらの批判の後につぎの如き結論が下される。行政理論における種々の困難な問題は、行政情況を記述し診断するための基準にすぎないものを行政の原理として扱ふところから生ずるのである。行政研究への正確な接近のためには、あらゆる適切にして特徴的な基準が互に関係づけられること、それぞれの行政の情況が基準の全体に関連して分析されること、また研究は

どの程度の比重が種々の基準にかけられるべきかを決定するものであること等を必要とする。この目的のためには、概念の明確化、記述の科学化が必要であり、行政の理論は先験的な推論によつて導かれるものではなく、実験的な方法によつてなされるものであろう。

あらゆる決定が二種の要素すなわち factual element と value element をふくむことは第1章で指摘されたのであるが、第3章はこれら二者に関する詳細な説明である。まず第一に“factual”および“ethical”の意味の差異が述べられ、それに関連して、決定作用の性格が論じられる。第二に、2つの要素と関係させて、行政と政策の特質および両者の差異が明確にされる。なお、上述の如き問題は何らかの哲学的背景を必要とする性格のものであるが、著者は論理実証主義を考察の出発点としている。

第3章において、行政決定の正確性は相対的なものであることが結論づけられたのであるが、目的達成のために効果的な手段を選択することは、行政における合理性に関係することでもある。行政理論の構成のために、合理性の概念を明確にすることは必要である。第4章では、決定に関する心理学的考察ではなく、決定の外的な環境—すなわち、選択をとりまく外的な情況—が考察される。まず、手段と目的の関係が説明され、目的—手段の連脈は、行動から、行動の結果として生ずる価値へと続く、因果的に関係した諸要素の系列として解釈される。また選択と関連して、知識は唯一の独自の可能性を発見する役割をもつものとして説かれる。最後に、合理性の種々の意味を区別するために若干の定義がなされる。すなわち、合理性は, objective, subjective, conscious, deliberate, organizational, personal 等の形容詞が附されることにより、その意味を変えてくる。

合理性の高度な段階に達することは単独の孤立した個人の行動においては不可能なことであろう。何故なら個人が決めねばならない二者択一の数はあまりにも大であり、彼がそれらを評価するために必要とするインフォメーションはあまりに

も夥しいからである。個人の選択は所与の状況の中で行われる。そして、行動はこれら所与のものによつて設定された限界内でのみ適合するのである。選択の環境そのものが選ばれかつ思慮深く変容される時、行動の統合や合理性は高度に達成される。このことは個人に関することであると同時にまた組織に関することでもある。組織が遂行する一機能は、組織員を、彼らの決定を組織の目的と適合させ、これらの決定を正しくなすに必要なインフォメーションを提供する心理的環境におくことである。第5章は、第4章が主として選択の過程における論理的要素の考察であつたのに対し、心理的要素の論察であり、また、そこでは心理的要素と論理的要素が対照させられる。内容は三つの部分に分けうる。まず、何故に個人の行動は合理性の基準からかけ離れたものになるかという理由が述べられる。つぎに、心理的環境は実際には如何にして形成されるのかという問題が考察される。そして、この環境は、一様の型に、刻々の選択の全系列を適応せしめる統一的な要素として解釈される。第三に、選択の心理的環境を確立する場合の組織の役割が研究される。すなわち、組織が個人の目的を選び、個人を訓練し、個人にインフォメーションをあたえる方法が論じられる。以上のことが、「合理性の限界」、⁵「個人における目的的行動」、⁶「行動の統合」の各項においてみられるのである。

第5章では、個人がその一部となる組織の他のものの行動と、個人の行動が統合されていくのを可能にする若干のメカニズムが述べられたのであるが、これらのメカニズムは、しかしながら、何故に個人が組織された集団に自ら進んで参加し、確立された組織の目的に自己の目的を従属させるかという問題を説明するものではない。第6章は組織の均衡が確保されるために必要な諸要素の考察にあてられる。すなわち、職員の組織に参加する場合の誘因と組織の目的および発展の関係、組織の均衡と能率の問題等が論じられる。

個人が組織のメンバーになる過程に関してはすでに論じられたことである。つぎに、我々は、組織は如何にして個人の行動を全体的な型に適合さ

せるのか—すなわち、組織は個人の決定を如何に影響づけるか—という問題に当面する。influenceは外的、内的の二つの側面—それによつて組織が個人に影響づけようとする刺戟と、刺戟に対する個人の反応を決定する個人の心理的態度—に區別されるのであるが、説明のために、両者を分離することは不適切であると Simon は云う。二つの側面は、それぞれ influence のあらゆる型（権威、コミュニケーション、訓練、能率、同一化）の中で、大なり少なりの役割を演じているのである。第7章は、多くの influence の一形態である権威に関する研究がなされる。まず、権威の意義および限界や、その現実の行使の際に生ずる諸問題が問われる。権威の重要な機能は、同意ということが得られないときでさえも、遂行すべき決定を可能にすることである。しかし、その権威の専横的な要素は下位者の容認の範囲によつて制限される。この容認の範囲の大きさは、権威が命令を強行するに有効であるという是認に依存するものであり、消極的な是認—物理的、経済的力—と同様に重要なのは、目的の共有、社会的承認、パーソナリティーであるとされる。なお、Simon⁷は権威の三つの機能として、responsibility, expertise, co-ordination を説明し、また、権威と関連づけて、命令系統の単一化や形式のおよび非形式的な組織に関して論ずる。

決定を影響づける要素としてのコミュニケーションの問題はすでに述べられたのであるが、決定の過程におけるこの重要な局面を一層体系的に考察することが第8章の意図するところである。第一に扱われる問題は、コミュニケーション体系の性質と機能であり、ついで、それはフォーマル、インフォーマルなものに分けて考えられる。第三に、コミュニケーションの機能のために専門化された、行政組織における諸要素が考察され、最後に、コミュニケーションにおける訓練の役割が論じられる。決定をなす機能の専門化は、decision-center に対する、およびそれからのコミュニケーションの適正な方法を発達させようか否かに大きく依存しているものであり、コミュニケーションは、フォーマルな体系のみでなく、インフォーマ

ルなものによつて補足される性質のものである。また、組織はコミュニケーションの機能のために専門化された特殊な機関を發展さすのであるが、その機関として decision-center, 調査部等が説明される。

第7章、第8章では、組織が個々のメンバーを影響づける方法に注意が向けられた。権威の体系やコミュニケーションは、それを通じて、組織が決定に関する何らかの基本的な前提を個人にあたえるものとして論じられた。つぎに、決定の内的な側面をみることに、組織的にあたえられた諸前提が、完成された決定へと如何に個人によつて組立てられていくかをみる必要がある。この目的のために、能率の基準、個人の組織への同一化または忠誠が第9章および第10章で考察される。第9章では、まず能率の性質がみられ、また能率に関する種々の批評（たとえば機械的能率等）がとり上げられる。つぎに、能率に関連しての分業化、能率と財政の問題等が論じられる。なお、Simon は、決定行為の factual aspects においては、行政官は能率の基準に導かれねばならぬことを強調する。

組織における個人の決定を導く価値や目的は、多くは組織の目的でもある。これら目的は権威の行使によつて個人に課されるが、しかし、大規模になると諸価値は内面化されたものになり、個人の組織への参加の心理や態度に結合されてくる。個人は自動的にすなわち、外的な刺激に対する必然ではなく一彼の決定が組織の目的と一致することを保証するような忠誠または愛着を得るようになる。第10章は、決定の心理的領域において根本的に重要な要素、すなわち同一化の考察である。同一化は、個人が彼の組織での決定を決める価値指標として組織の目的を彼自身の目的にかえていく過程である。組織の構造は、それが創り出す同一化の型が社会的価値と組織の価値との間に一致をもたらす範囲において社会的に有益であること、同一化は、個人が自己を結合させる価値の限られた領域が、その領域外の他の価値に対して比較されねばならぬ場合に、個人の適正な決定を妨げる傾向を含むものでもあるから、この決定の偏向を最小にするべく組織の構造は設計されねば

ならぬこと、また同一化が偏見の介入を許すのではなく、適正な決定行為に貢献する方法で分業等はなされるべきであること等の諸点を、同一化の意味や心理的側面を考察しながら Simon は強調するのである。

本書は行政の実践面に関する研究というよりは、分析と記述にその主たる目的がおかれている。すなわち、組織の分析と生理をとり扱つたものと云えよう。著者は適正な医学の実践の方法は有機体の生理に関する知識によつてのみ見出されるのであるから、行政の実際的な問題に対処するまえに、まず科学的な記述と分析が必要であることを強調する。第11章は、すでにみられた行政の場の記述と分析のための枠組、あるいは行政組織を正確に考察するために考慮されねばならぬ諸要因を前提として試みられる組織に関する分析である。組織の分析は決定行為の分布と割当の中に見出され、組織の生理は、組織がそのメンバーの各々の決定に影響づけていく過程の中に見出されると Simon は云う。最後に、彼はこの書がなし得なかつた行政の場のケース・スタディを發展させ、行政活動の成功を測定するための技術を發展改良する研究が必要であることを説く。なお、巻末に「行政学とは何か」の題名の下に追録が附されている。

本書の巻頭において、C. I. Barnard は、本書がフォーマルな組織や行政に関する社会学的考察に大きな貢献をなし、また行政行動を科学的に記述するに際して非常に有益な著作であると述べているのであるが、教育行政を理論的に考察する場合、本書の示唆する概念の明確化、科学的記述方法は十分貢献するものであろう。また、J. D. Millet は、本書が組織の研究者にとって重要な書であり、Simon は更に進んで行政機関における人々の共同を理解するための充実した結論を導くべきだと述べている。(Book Review Digest (1947)) 教育行政は教育を対象とする行政である以上、その理論化においては常に教育活動と行政が有意義的に結合されているべきであろう。この点に留意するならば、本書は教育行政の理論化のために一般的基礎をあたえるものとして少なからぬ意義を有するものではなからうか。

教育実践の記録に就いて

寛 田 知 義

ここ二三年來、小中学校の教師による生徒の実態の記録や教育実践のすぐれた記録が多く出版されている。これらの記録は今までの現場の研究や教育学者の研究と異つて、生徒の作品とか、生徒の具体的な行動あるいは教育指導の実態を具体的に記録してあり、それだけに生徒や教師の活動が生々と描れており、興味深くまた価値のあるものも多い。

「父母と先生に訴える」*（相沢保治著）はいままでも教育学者や心理学者によつてもとりあげられた教師や父兄或いは大人の生活様式や考え方に対する不信や非難を小学校・中学校・高等学校のそれぞれの段階に於ける生活上の問題と関連させて生徒の作文を通じて述べている。更に学校生活の間に於いて問題視されている男女交際や中学・高校に於ける自我意識に関する記録などものせられている。この記録はこうした教師や父兄に対する態度、男女交際、自我意識等々の事項に従つて生徒の感想や作文が集められて生徒の実態とその適切な指導の必要を訴えている。しかしながら小学校から高校に至る広範囲なものになつたために、それぞれの事項に就いての一貫性が少く、記録というより問題点の実態を把握する研究のような形式をとりながら、結果的には単なる素材の提出に終つているのは惜しい気がする。むしろ中学校のみに限定して行つたらもつとすぐれたものになつたと思う。

これと対蹠的な傾向と方法をとつた記録として「もんべ教室」**（藤本晋一郎）を挙げる事が出来よう。この著書は一学級の六年間の子供の様々な活動が教師の観察を通じて描かれ、そのなかに子供の作文や感想なども入れているが、どこまでも教師の子供観や教育観のもとに綴られた記録である。ここでは学級内に於ける友人関係や学

級生活、学校生活或いは校外生活等々をそれぞれの学年の特徴を明確に示して描かれ、それら生活の場で出会う平凡な生活全般の問題やそれと対決していく子供達の様子が具体的に生々と誠に巧みに描かれている。同時にそれらの事実の中に教育も完全に入り込み活動し指導している記録も数多く、教師と生徒との関係に就いて述べられている。これらは特定の事項によつて整理されずに、それぞれの学年に於いてこれらの活動を並列的に挙げてあるためにその学年の一般的特質や、教育の一般的な原則や方法を明確に見出していくことは出来ないが、それだけにまた平常見落している平凡な子供の実態や問題を知ることが出来る。一学級の六年間の記録であり、一つ一つの記録はそれぞれ教育的意味を持ちすばらしいものではあるが、あまりにも子供の実態が中心であり並列的であるために、学校教育の持つ組織的なものが全然描かれていないのは、この記録の編集方針の為かもしれないが、少しは欲しいと思われる。

「学級革命」***（小西健二郎著）は著者の学級経営から学級内にあつた問題を子供の活動を中心にして、それに対処して行われた指導の経過を生徒の日記、生活綴方と教師の観察記録によつて述べている。これは生活綴方を基盤にして生活指導を行い、身体虚弱児の劣等感の解消、学級ボスの解消等を子供等が学級全体の中で討論し、活動し、教師の助力によつて行つたことが中心に記されている。ここでは学級集団に於いて集団意識を持たせ、それを基礎にして一人一人の子供がすべて相互に助合つて育つていくように、また問題を解決していくように指導されたすぐれた生活指導、生活綴方の実践記録がのせられているが、その集団の基礎である学級をそのように作り上げるまでの記録がなく、その問題に直接関係のある事

* 「父母と先生に訴える」相沢保治著 角川書店 昭和31年9月15日

** 「もんべ教室」藤本晋一郎著 三一書房 1956年8月13日

*** 「学級革命」小西健二郎著 叢書店 昭和30年9月24日

実の記録や作文に限定されているために、生活指導の実体や方法はすぐれたものであり、教育活動はすぐれた計画と労力を必要とする大変な仕事だとわからせてくれているにもかかわらず、問題の解決そのものが誠に安易に行われているような感じを抱かせる。これはこの記録の実践例が特にすぐれているにもかかわらず随所にそれに関して書かれた理論的な説明が浅く、そうした点で更に研究が深められるならば資料の蒐集や記録が更に充実したものになったであろうと思うと惜しい気がする。

現場の教師が教育実践を行う直接の対象は子供であるが、その教育活動が十分に効果をあげるためには父兄の協力が必要であり、また何んらかのつながりを父兄と結んでいる。「ガリ版先生」*（須田清著）は学級担任の教師が学級の父兄の協力を子供の教育を通して得て、教育実践を行った記録であり、主として父兄への働きかけを中心に述べている。この記録では新しく担任になって初めて父兄や子供に働きかける方法や、授業の見方や、教材の研究を父兄と一緒に話し合い、唯子供の様子を父兄に知らせ協力を求めるだけではなしに積極的に父兄に対する啓蒙を行った方法や実情を述べている。更に学級の子供の教育の充実、父兄への積極的な働きかけを行うにつれて起る仕事の多忙によって教育活動が阻害されないようにするにはどうすれば良いかという問題にもふれている。これは近来研究の名目で授業がなくなったり、雑務の多量のために授業の準備がなされなかつた為に日々の実践効果の減退なり内容の低下がよく云われており、現場では切実な問題であると思う。須田氏はその解決や問題の原因を学校経営のあり方に求め、学芸会・運動会・展覧会等の学校行事の運営方法の再検討や学校に於ける教科研究会や、学校に於ける研究課題の不自然さなどが学校経営を歪め、それがひいては学級経営なり平常の教育実践の充実を阻害しているとして、その改革に就いて報告している。戦後学校教

育の機能や教育内容の領域が拡大されたために、また戦後の開放感などのために、学校行事が盛んになり数多く且つまた盛大な規模を持つものが多くなり、それらはそれなりに価値あり教育効果もあるものであるが、一方に於いて平常の学級の授業や教師の労力を費すことが甚しいのであるから当然これはとりあげられるべき問題であると思う。つまりこの記録では教育実践の直接的なものよりはその条件の整備といった記録であるが、ややもすれば実践は教室の中だけで行われ、それ以外の活動には適当に適応していく人の多い現場の教師には一つの問題を提出した資料として注目すべき記録と思う。

こうした父兄との関係を更に広めて地域社会と学校との関係を扱ったものに「谷間の教師」**

（水野茂一著）がある。これは近頃になって注目された僻地教育の記録であるが、内容は僻地の学校施設の悪さ、それを改造した学校作りや僻地の人々の教育観、教師の役割など地域社会に於ける学校の機能に就いて述べている。これは「ガリ版先生」の如く、子供に対する教育活動の記録は少く、むしろ地域社会に対する教師の働きかけが中心であり、それがまたいかに必要であり大きな役割を持つかを訴えている。それとともに僻地の教育そのものの記録のないのがこの記録の弱さになり、また教師の活動自体も何かあまりにも中心的すぎてあらゆることを一人でやらなければならないかの如き印象を与える。

野名龍二氏の「かえるの学級」***は一年と二年生しかない小学校の分校での二年生の一年間の学校教育の記録である。これには学年はじめの教師の指導方針、計画から学習指導の様子、個人指導、集団指導の問題、集団構成、一年間の子供の成長、父兄との関係等々、学級担任として教師の仕事や実態や問題などがその時期に応じて、或いは問題に関係して生徒の作文や教師の記録によって述べられている。この記録はとりあげた範囲や内容の広さのために、資料の少なさや、問題の発展

* 「ガリ版先生」須田清著 新評論社 昭和31年5月10日

** 「谷間の教師」水野茂一著 平凡社 昭和31年9月28日

*** 「かえるの学級」野名龍二著 新評論社 昭和31年5月30日

の筋道の混乱もときにはみられて十分に完成された記録であると言うことは出来ないが、一応学級活動を中心とした教育の実態を知らせてくれるし、今日の学校教育というものがいかに組織的なものであるかと言うことも不十分ではあるが示してくれている。そうした意味では現場の実践記録としてすぐれたものであると思う。

今までの実践記録は教育の問題や子供の実態の問題点を強調してその指導を中心に記録されたものが多かつたが、こうした記録も必要なことは勿論であるがその解決が御医者が病人を治すごとき印象を与えるものが多く、その問題を強調するあまりに、とかく教育は良き方法による個人の指導で解決する仕事の如き印象すら持たせるものが多い。つまりある個人の教師の教育的な知識で臨機応変で行われていくのが教育活動であり、良き教師の人間的な感化なり指導が教育の大部分を占めるが如き印象を与える記録もある。しかし今日の学校教育はそうした良き教師の指導の大切なことは勿論であるが、もつと総合的に計画され組織された教育であり、各種各様な内容を持ちそれが

組織的に行われているところである。それ故に良き個人の教師の記録であつてもそこには学校教育のもつ多様な諸活動が総合的組織的に行われ、それでも尚、そこに出て来る問題をそのなかでとりあげて指導していく様子を知らせてくれる記録が欲しいものであると思う。そうした意味で野名氏の「かえるの学級」は新しい実践記録の方向として更に完成されることを望みたい。

更にこれらの実践記録は個人の実践記録ばかりであるが、こうした実践記録が同学年の学級担任の教師の共同研究、学校全体の教師の記録の集積が組織されて一つの記録として出されるならばもつとすぐれた記録が生れるのではないかと思う。

尚、紙数その他の関係で養護施設の子供の記録である「集団に育つ子ら」(積惟勝著)、生活綴方と体育を結びつた教育実践の記録「体育の子」(佐々木賢太郎著)、小学校一年生の学校生活の様子を写真で示してくれた特異な方法をとつた記録である岩波写真文庫の「一年生、一ある小学教師の記録」(写真、熊谷元一、説明、瀬川良夫)等々、その他多くの実践記録にふれることが出来なかつた。

R. T. ラピエール 「社会統制論」

A Theory of Social Control. By Richard T. LaPiere.

New York : McGraw-Hill Book Company, Inc., 1954, XI 568 PP

富士貴志夫

はじめに、著者ラピエールを簡単に紹介しよう。彼は1899年にアメリカに生まれ、スタンフォード大学を卒業し、そこの助手にはじまつて、社会学教授となつたが、一時ミシガン大学の社会学教授を兼任していた。現在、彼はマックグロウヒル書店の社会学および人類学関係の編集顧問でもある。その主著としては、フェーンズワースとの共著、Social Psychology, 1930 (第三版1947) Collective Behavior, 1938, Sociology, 1946. などがあげられる。ここで取扱う A Theory of Social Control は1954年に出版された彼の多年にわたる研究を集大成した労作である。

ところで、彼のいるスタンフォード大学は、じつは社会統制についての最初の著作者といわれる E. A. ロスのいた大学であり、ミシガン大学といえば第一次集団論で有名な C. H. クーリーのいた大学である。もちろん、ロスは1906年からウィスコンシン大学に移つており、クーリーもまた、ラピエールがミシガン大学にいたときは、すでにこの世を去つていたが、彼の理論はこうした事情に無関係ではなく、ロスとクーリーの影響を強くうけている。なお、彼は社会学者ではあるが、本書に示された社会統制論は社会心理学的理論である。南博は「アメリカ社会心理学の動き」(「思

想」昭和29年2月号)のなかで、アメリカ社会学者が社会心理学に参加する傾向は、いよいよ盛んであると述べているが、彼もその一人であつた。

本書の内容は全体で三部に分けられ、第一部は「序論」、第二部は「社会統制の性質と作用」、第三部は「社会統制とカウンターコントロール」と題されている。

彼の社会統制論の根本となつている考えは、個人は自分の所属する集団、とりわけ小規模な第一次集団内で、安定したよりよい地位(status)を獲得したいという欲求をもつために、その集団規範に同調した行動を営むようにしむけられるという主張である。

それでは、この考えに基づいて展開される彼の社会統制論は、従来の社会統制論に照らしてみるならば、どのような立場にあり、どのような特色をもつものであるか。

社会統制論の概念規定や問題領域はいまなお甚だ曖昧であり、その研究態度はさまざまに分かれている。これまで社会統制論の主流をなしてきた学者の多くは慣習、法、道徳、宗教などの諸規範を社会統制の種類として論じてきた。これはロスの概念規定をうけついでいきかたである。他方、社会心理学者は、社会統制を分析するにあつて、環境と個人との相互作用という社会心理学的構造を解明することを主たる任務としてきた。だがラピエールは、社会統制論に前提される規範を、小集団におけるそれにしぼつて考察しようと試みた。このことは第一部における社会統制の規定をみれば明らかである。彼によれば、人間行動を決定する要因には三つある。すなわち内的要因としてのパーソナリティと、外的要因としての状況(situation)と社会統制である。このうちパーソナリティについてはここで説明するまでもないが、「状況」は個人に特定行動を促す直接的な要因として作用し、社会統制は個人が特定集団の成員である限り、「その占める社会的地位への顧慮(regard for status)を払わずしては行動できない」という事実に基づいて作用すると規定される(第一部第三章)。一般に集団成員としての個人は、集団内部で彼が占める地位に応じて何らかの

形で規範化された役割行動を営むことを、他の成員から期待されているといえる。ところで、そうした社会的役割のなかに具現されている諸規範が、パーソナリティの自発的行動によつて、あるいは集団外部での「状況」の作用によつて維持されるとは限らない。現実ではつねに逸脱行動が生じる可能性がある。だから、このような逸脱に対して成員相互の間で作用している統制作用が「社会統制」であると考えることができる。このように、彼は規範を前提とする立場をとるとともに、社会統制を規範がパーソナリティへ内面化されていく「社会化の過程」から区別しており、同じ立場にありながら社会化を社会統制のなかに含めて考える多くの論者(例えばP・H・ランディス)とは相違している。そして社会統制を規範的役割形式からの逸脱に対処するメカニズムとして論じたT.パソンズの考えとはほぼ一致する。だがラピエールの社会統制論に最も特色的な点は、彼が「個人の地位への顧慮」は小規模な親密な持続的な第一次集団において特に意味をもつと考へたことであつた。

では、その理論的根拠は何か。彼はいわゆるゲマインシャフト=ゲゼルシャフト概念を・クーリーの第一次集団論の考えに基き、またクーリー以後発展させられてきた小集団研究の立場から批判している。近代社会においてもゲゼルシャフト的集団のほかにはゲマインシャフト的集団が存在し、前者に比して後者の果す統制的役割は無視できない。なぜなら社会的地位には、ゲゼルシャフト的地位(例えば課長とか係長といった地位)とゲマインシャフト的地位(例えば顔きぎとか人気者)があり、多くの場合後者は前者よりも「特殊的地位」として高く成員によつて評価され、したがつてそれが梃子となつてインフォーマルに働く統制は、前者にみられるフォーマルな統制の効果に重大な影響をもたらすからである。彼はこのようなゲマインシャフト的地位を与える集団を「地位集団」(status group)と名づけている。つづいて、第二部では統制の手段論が述べられている。その場合、主問題はサインやシンボルによる心理的制裁と、成員に予期されるだけで現実には行使

されない制裁についてである。しかもこれらはいずれもインフォーマルな性格をもつものとして論じられている。

このように、彼が社会集団や社会関係におけるインフォーマルな側面を重視する小集団論を社会統制論に反映させ、地位集団を統制の重要な媒体として問題にしたのは卓見であつた。しかしそう簡単に言いきれないようでもある。というのは最近わが国においても、小集団論が活発に論じられ、アメリカ社会学または社会心理学における第一次集団論に対する批判が行われているからである。昨年(昭和31年)の「思想」の7月号では田中清助が、11月号では北川隆吉が論じた問題がそれである。まず田中の批判の一つは、小集団論で問題にされてきた人間関係は単なる相互関係性であつて、基本的観念として社会的階層(social status)が導入され、その限りでは階級の敵対関係は見落されるという点にあつた。一方、北川もほぼ同じ立場から、産業心理学における小集団研究は労資の階級的対立を蔽いかくすものであると批判した。

たしかにラビュールの社会統制論も、単に地位集団内部での上下の地位的観点しか問題にしている。そして階級的観点からの考察を欠いていることは第三部において、彼がカウンターコントロールの問題にふれ、社会変動論に論及している箇所において最も明白にあらわれている。そこでは個人が集団規範に効果ある変化を与えることによつて支配を獲得する技術(暴力、そそのかし、詭計、説得など)が詳しく論じられている。しかしそれはあくまで階級ぬきの変動論であり、歴史的段階論を含む変革論ではない。だからこのことはラビュールの限界といえるであろう。それにしてもラビュールのアメリカ社会の部分的な面に対するすぐれた洞察、つまりは小集団論一般の成果が無益であるということとはならない。階級の矛盾こそ主要な問題であると主張し、小集団には副次的な重要性しか認めない批判者でさえ、サークル活動や集団教育に深い関心を示しているのはなぜか。日本の第一次集団論の多くは、サークル活動の活発化という実践的次元での事実によつてアメ

リカのそれとは全く違つた文脈のなかで理論化しようとしてはいる。だが、「第一次集団の発見」は、一方では従来の巨視的社会学理論の盲点をついたものであり、他方ではマルクス主義が今後解決すべき点を示唆したものといえよう。

アメリカ社会学および社会心理学は問題を提供したのであり、その研究の功績は正しく評価されねばならない。ただ小集団論といういわば微視的研究が、巨視的研究から得られた成果と無関係にどこまでもおし進められるならば、小集団とそれを包む全体社会との関連は解明されないのではないか。そのためには、困難ながらも巨視的研究と微視的研究の統合への道を歩むべく努力が払われねばならない。ラビュールは地位集団を数学的な(集団規模の大小といつた)、その意味では普遍的な基準によつて規定したため、資本主義社会における特殊の地位集団を見失うことになつたのではないか。これに関して永井道雄の「近代社会の小集団」(「人間と社会」川島武宜編「人間の科学」第3巻 中山書店 昭和31年)は、各種の小集団をその性格の相違によつて分類し、小集団を全体社会と関連させて考察しているが、これは小集団論の一つの新しい試みともいえよう。

これまで、アメリカの学者は社会統制の問題を重視してきた。その場合にみられる共通の立場は、現在の社会を変革するのではなく、現状のままそれを何らかの形で統制しようとするものであつた。小集団に焦点をしぼつて論じたラビュールの社会統制論も、現代アメリカ社会の一面に対するそのすぐれた洞察にもかかわらず、根本的にはこうした立場にあるために、理論の強さが失われているという感じを与えるのではないか。

以上みてきたように、本書はいくつかの理論的欠陥をもつてはいることは確かである。しかしながら、彼が植物採集の調査に終始せず、分散した経験的データを組織化し、G. ホーマンスの The Human Group (1950) と同じように、理論構成に努力したことは、人間行動の理解に貴重な礎石を築いたことになろう。

Democracy and Social Structure in Pre-Nazi Germany,
Talcott Parsons.

Essays in Sociological Theory, Revised Edition (1954),

Talcott Parsons. The Free Press, Glencoe, Illinois.

藤 本 浩 之 輔

戦後の日本社会は、ナチス抬頭以前のワイマール体制のドイツ社会によく似ており、ネオ・ファシズム抬頭の危険性を多分に内包していると言われることがある。そういう関心からか、最近、ナチスの暴虐、そのもとにおける体験等を綴った記録や文学書が出版され、また政治的、経済的、思想的、社会構造的等色々な方面からの理論的研究も盛んに行われている。思想12月号(1956)においてもナチズムに関する三種の論文、すなわち、若きヒットラーに影響を及ぼしたオーストリア・ハンガリー帝国の社会状況との関係において、ヒットラー自身のパーソナリティと思想の形成を述べた村瀬興雄の「ヒットラー主義の形成過程(その一)」、ドイツ・ロマン主義を中心とした思想史的側面からの研究である宮田光雄の「ドイツ・ファシズムの思想史的基盤」、経済的機構の側面から分析した安藤英治の「ナチ・レジームにおける合理性と非合理性」がとりあげられたことも、この傾向を顕著に示すものであろう。このような色々な方面からのナチズム批判に対して、しばしばドイツ思想家によつて行われる反批判の試み、例えばナチス運動(Nazi Movement)をドイツ史における一種の異邦人的なものであるとする主張や、ドイツ民族を情緒的に眺めようとする傾向もあるようである。なる程、現実において、いわゆるナチ的犯行そのものは比較的少数の人々のみ加担したのかも知れない。しかしながら、ナチ的犯行に全てのドイツ人が引きずられていつたということこそ問題なのである。すなわち、政治的無関心や自由からの逃走等の形式において、全てのドイツ人は、それぞれ何らかの責任を分かち合っていると云わねばならない。私が今から紹介しようとする論文は、ナチス運動の政治的経済的条件ではなく、その基盤となつた社会構造の分析に視点が向けられている。

そういう点において、E・フロムの「自由からの逃走」と共に注目すべき論文であると思われる。

パーソンズの問題意識は次の点にある。ドイツでは、1918年の敗戦の結果、民主化、封建的要素の撤廃等、他の進歩的な西欧諸国の発展方向と同じ方向への努力がなされた。しかしその結果が不安定に終り、しかも急激に急進的な反自由、反民主主義的な運動へと転換されていつたのは何故か。確かに、敗戦後のドイツに対する連合国の政治的圧迫、経済的転落、階級斗争等外的条件は重要視されねばならない。しかしこれらに比較しうる重要な役割が、ドイツの社会構造に特殊であるいくつかの要因によつて果されたのではなからうかという点である。彼によれば、中世以来発展の傾向にあつた合理化の運動は、ドイツ封建社会に不安をもたらし、ロマンティシズム(romanticism)の根を深くおろさせた。その上敗戦による政治的、経済的緊張から、ロマンティシズムの傾向は更に強められ、その傾向をたくみに把握したところに、ナチスの国家社会主義(National Socialism)の運動の成功があつたとし、そして又このロマンティシズムの傾向は、近代社会には本質的に存在するというのである。

パーソンズは、ドイツ社会全体を特色づけけたものとして、プロシヤ保守主義の二つの要素とドイツ社会の男性優越性をあげる。(1)プロシヤの土地所有貴族(landed nobility)は将校と結合し、皇帝に直接責任を負うという関係により社会における最高の権威を形成した。(2)地方君主制(centralized territorial monarchies)の発達的一面としての官僚制。この封建的要素の強い官僚制における形式主義(formalism)、お役所主義は近代産業組織にも影響し、地位の形式化の傾向が顕著であつた。この形式性を示す社会的現

象として、称号 (title) の広範な使用、その複雑性、私的な領域や能力の領域においても重要視されていること、等を指摘する。(3)ドイツ社会では夫や父親が支配的であり権威をもっている。婦人は服従的であり、三従の徳とも言うべき three K's (Kinder, Kirche, Küche) にしばられている。同時にドイツでは romantic love pattern の発展の程度は低い。以上あげたような封建的要素は、1918年の革命の結果弱まる傾向にあつたが、社会構造の中には依然として根深く残つていた。ここでパーソンスは、ワイマール体制が何故定着しなかつたかという点に関し、戦後の国際的、経済的、政治的条件から結果する不安、近世の合理化過程から結果する不安、更にそれらの不安から発生するロマンティシズムの傾向を考察している。合理化の過程は(その絶対的意味を別にして考えれば)合理主義を受け入れる側にも、阻止しようとする側にも不安の源泉となつた。科学、技術の発達と共にあつて来る合理主義の運動は、伝統的 pattern, 宗教的価値、保守的文化要素の否定を必然的に伴つて来る。しかし、ドイツ社会のように保守的要素の強いところでは、これに対する抵抗も強く、合理主義は勢い急進的な傾向をおびるようになる。急進的になればなる程、合理主義は社会構造に根をおろすことが困難になるが、一方伝統的保守的 pattern も、もはや青年や婦人の pattern とはなり得なくなつている。結局どちらの側にも不安が存在するのである。その上に、敗戦の結果発生した不安が加わり、それらの不安に対する反動として、ロマンティシズムの発生という現象がおこる。ドイツの場合のロマンティシズムは、現実の生活情況から分離して未来又は過去の中に情緒的に逃避することであつて、アメリカにみられる personal success, romantic love pattern のロマンティシズムとは本質的に異なつている。このような当然おこるべき社会構造の中でナチスの国家社会主義の運動がおこつて来たのである。そしてその運動は次の四つの国民的要素に受け入れられるのである。(1)先ず、ドイツ社会の封建的保守的要素は、合理化に反対すると共に、計算合理的な資本家に反対し、兵士

を理想化しているため、ナチスの訴える国家的栄光、軍国的価値に共鳴した。(2)急進的合理主義に危険を感じる要素。(3)ブルジョアの打算的実質主義、安全主義に反感を抱く青年、(4)最後に、性的役割 (sex role) において服従的であり、権威主義的であるドイツ婦人は、英雄的兵士をその理想像として受取つたのである。

以上、パーソンスの論文の紹介をしたわけであるが、民主的なワイマール体制のもとにおけるドイツの社会情況と、敗戦によつて民主化の方向づけが与えられた日本の社会情況には多くの共通点があることを認めないわけにはいかない。日本社会の封建的要素である天皇制封建主義、官僚機構や職場における地位の形式性や称号の重要性、男性の優越性等々は、敗戦による民主主義革命により否定されたとはいえ、法律的次元にとどまつていることは否定出来ない。そして従來の価値体系に代わる新しい民主的価値体系は、日本の社会構造の中に根をおろしてはいない。このように価値や規範の混乱によつて、如何に生きるべきかの基準がなく、その上加えて敗戦による国際的、政治的、経済的緊張と困難から、現在の日本の社会に大きな不安が内包されていると言わねばならない。日本の労働運動や学生運動が、世界の他の国に比して尖鋭であり、一方また「太陽族」という社会現象が存在するのもこれを示している。そこで、パーソンスがドイツ社会について分析したロマンティシズムは、戦後の日本社会においても大衆の間に広く行きわたつていると考えられる。すなわち、戦記物のブーム、時代劇映画の大衆へのアピール、民謡の復活等一連の社会現象に端的に表現されており、ロマンティシズムをもたなくなつたと言われる現代の若者(太陽族も含めて)も持たないのではなく、やりたいことをやるとか、現在の生活を最大にエンジョイするという刹那的なロマンティシズムに変化して来ているのである。このように考えてみると、ドイツ社会の不安とロマンティシズムが、ナチズムの基盤となつたように、現在の日本社会の不安とロマンティシズムが、ネオ・ファシズムの温床となる危険性は大きいと言わねばならない。なお、パーソンスのこの論文において注意

文 献 抄 録 : 藤 本

せねばならないことは、この論文は1942年に発表されたものであり、ナチス運動は終末を告げてはならず、しかもアメリカとは交戦中であつたという事実。そしてまた、調査研究を基礎として書かれたものではなく、図式的 (schematic) な分析であることである。そうとはいえ、ワイマール体制下になお残存するプロシヤ保守主義の分析に注意が払われていることは、民主憲法のもとにおける日本社会の封建遺制の重要性を充分認識させるように思う。

最後になつたけれども、本論文の著者T. パーソンスについて簡単に紹介しておこう。T. パーソンスは、1902年E. S. パーソンス (晩年オハイオのマリエッタ・カレッジの学長) を父として生れた。1924年アムハースト・カレッジを卒業。専攻は生物学であつたが学期の終り近く経済学に転じた。1924年から1925年にかけて、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで、ホブハウスおよびギンスバーグについて社会学を学んだ。同時に機能主義の人類学者マリノフスキーの影響を強くうけた。ついで1925年から1926年にかけて、

ウエーバー没後のハイデルベルヒ大学でウエーバーを学ぶと同時にマルクスによる資本主義社会の分析に興味をもち、それまでの経済学上の知識に多くの変革をもたらした。その後、母校であるアムハースト・カレッジの助手を経て、ハーバード大学の助手に転じ、1936年同大学の助教授に任ぜられた。1944年に正教授となり、現在は同大学社会関係学部の主任教授である。著書、論文は多いが、その主なものをあげると、The Structure of Social Action (1937), Essays in Sociological Theory—Pure and Applied (1949), The Social System (1951), E. シルスとの共著である Toward a General Theory of Action (1951), E. シルス及び R. ベイルズとの共著である Working Papers in the Theory of Action (1953), Family (1953), Essays in Sociological Theory—Revised Edition (1954) 等々である。なお私がここで紹介した論文は、1949年に出版された論文集には含まれておらず、1954年の改定版において他の八篇の論文と共に新しく載録されたものである。

京都大学教育学専攻卒業生著作目録

* は著書を示す

長田 新 (大正4年卒)		
宗教と教育*	福村書店	昭和24年
ペスタロッチ伝 上・下*	岩波書店	昭和26年
村上瑚磨雄 (大正6年卒)		
新教育と旧教育*	西荻書房	昭和23年
わが子のしつけ 外11篇	道德教育 第2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 11, 12, 13, 14, 15号	昭和27~30年
悔なき青春*	近藤書店	昭和30年
民主主義教育としつけ	道德教育指導講座 (2)	昭和31年
小原 国芳 (大正7年卒)		
教育立国論*	玉川大学出版部	昭和21年
教育の根本問題としての哲学 (改訂版) *	同上	昭和29年
世界教育行脚*	同上	昭和31年
末包留三良 (大正8年卒)		
英国普通法の伝統的概念	近畿大学法学部発刊「法学」	昭和29年
英国裁判所の判決	同上	昭和29年
英国普通法の概念概成における判例と訴訟手続の意義	同上	昭和30年
英国普通法の発達における法曹団体の偉業	同上	昭和31年
英国古代の判例集に関する若干の考察	近畿大学30周年記念論文集	昭和31年
近世英国判例集に関する多少の考察	近畿大学法学部発刊「法学」	昭和31年
加藤 仁平 (大正9年卒)		
報徳に生きる*	日本図書文化協会	昭和31年
辻 幸三郎 (大正9年卒)		
広島県における教員養成80年	広島県教育80年誌	昭和29年
石崎恒次郎 (昭和3年卒)		
現代教育社会学*	理想社	昭和27年
大阪市の各地区と青少年の人格形成との関連について	教育社会学研究 第6集	昭和29年
現代教育原理*	理想社	昭和30年
教育原理 (二) *	浪速短大保育科通信教育部	昭和30年
大塚 喜一 (昭和3年卒)		
人間倉橋惣三先師	幼児の教育	昭和30年
幼児と女性*	豊国プリント	昭和31年

京都大学教育学専攻卒業生著作目録

聴く一心	禅 18集	昭和 31 年
静坐記念日参加感想 二	静 坐	昭和 31 年
後藤 三郎 (昭和 3 年卒)		
新学校暦及び講話資料*	富 士 書 店	昭和 25 年
私たちの東京*	慶応通信教育図書株式会社	昭和 25 年
中江藤樹の人と学と教育について	石川謙博士還暦記念論文集 「教育の史的展開」	昭和 27 年
石山 脩平 (昭和 5 年卒)		
西洋古代中世教育史*	有 斐 閣	昭和 25 年
西洋近代教育史*	同 上	昭和 28 年
The Formation and Characteristics of the Polis-education	The Japan Science Review	昭和 30 年
大西 貞一 (昭和 5 年卒)		
労作教育思想の根本問題	山口県教育学会誌	昭和 28 年
教育における自覚性 其ノ 1, 其ノ 2	同 上	昭和 29, 31 年
手 (解釈学的試論)	山口女子短期大学紀要	昭和 31 年
真実の世界	弥 栄	昭和 31 年
中島 万朶 (昭和 5 年卒)		
ソクラテスに於ける自己活動の原理について	京都工芸繊維大学繊維学部学術報告	昭和 29 年
明治時代に於ける洋学	同 上	昭和 30 年
西洋教育史概説*	三 和 書 房	昭和 30 年
前田 博 (昭和 6 年卒)		
学校とその機能	哲 学 研 究	昭和 24 年
教育における経験と思考	大 谷 学 報	昭和 24 年
教養と有用—ゲーテの教育思想—	哲 学 研 究	昭和 25 年
宗教への教養—シュライエルマッヘル 教育学における宗教論の意義—	大 谷 学 報	昭和 25 年
教養と有用—デューハイの自由教育論—	九州大学教育学部紀要	昭和 27 年
教育社会における学校の地位	大谷大学研究年報	昭和 27 年
学校と教師の自由	講座「教育社会学」	昭和 28 年
教育のめざすもの*	明治図書出版株式会社	昭和 28 年
現代学校教育論*	同 上	昭和 29 年
シラー美的教育論の背景	九州大学教育学部紀要	昭和 29 年
シラー美的教育思想の発展	教育 学 研 究	昭和 29 年
美的道徳と道徳的美	九州大学教育学部紀要	昭和 30 年

京都大学教育学部紀要 Ⅲ

シラー美的教育論の本質	大谷学報	昭和30年
英国19世紀後半の自由教育論について	人文研究	昭和31年
教育史上のシラーとヘルバルト	哲学論集	昭和31年
西元 宗助 (昭和7年卒)		
教育的自覚の構造	西京大学「人文学報」	昭和28年
同和教育の基礎理論	同上	昭和29年
同和問題 外3冊*	法蔵館	昭和30年
被差別意識調査	教育学研究	昭和31年
岡本仁三郎 (昭和8年卒)		
スペンサーの教育思想	大阪学芸大学研究紀要	昭和29年
スペンサー「教育論」*	玉川大学編 集部	昭和30年
現代教育原理 (共著)*	理想社	昭和30年
田中 健一 (昭和8年卒)		
ガイダンスの新傾向	京都市立美術大学美術教育研究会刊「美」	昭和27年
関 秀華 (昭和9年卒)		
明治における実業教育の発展に対する一考察	福井大学学芸学部紀要 社会科学篇	昭和30年
明治前期における政治と教育	福井大学学芸学部紀要 教育科学篇	昭和31年
寺本 彦 (昭和9年卒)		
サルトルの実存主義におけるヒューマニズムの探求	島根大学論集	昭和30年
広瀬 正 (昭和9年卒)		
我が国における庶民教育	京都女子大学紀要「東山論叢」	昭和26年
玩具の必要性	保育資料	昭和29年
教育原理*	内外印刷会社	昭和29年
青年心理*	同上	昭和29年
教育心理*	同上	昭和30年
色彩と児童精神との関係	保育資料	昭和30年
フレーベルの児童観	同上	昭和30年
三浦 広吉 (昭和9年卒)		
木村(素衛)美学における理念について	北九州大学論文集 第3集	昭和28年
西田哲学における芸術について	同上 第4集	昭和29年
赤羽 英市 (昭和10年卒)		
学級経営の実践*	明治図書出版	昭和28年
学級会運営の実際	特別教育活動叢書	昭和30年
黒木 一男 (昭和10年卒)		

京都大学教育学専攻卒業生著作目録

子どもの見方	保 育	昭 和 27 年
幼児の教育	同 上	昭 和 28 年
明るい家庭*	ひかりのくに昭和出版社	昭 和 31 年
谷口 武 (昭和10年卒)		
ブーカー・ワシントン*	玉川大学出版部	昭 和 26 年
原 尚武 (昭和10年卒)		
集団場面における指導	滋賀大学学芸学部紀要 第4集	昭 和 30 年
集団指導における人間関係	同 上 第5集	昭 和 31 年
藤原 英夫 (昭和10年卒)		
人間形成と教育	文芸と思想 第8号	昭 和 29 年
教育の位相	九州大学教育学部紀要 第3集	昭 和 30 年
石原 鉄雄 (昭和11年卒)		
科学・教養・世界観 (訳書)*	関 書 院	昭 和 29 年
歴史と教育のあいだ	和歌山大学学芸学部紀要 教育科学篇	昭 和 30 年
永谷 孝治 (昭和11年卒)		
スーパーヴィジョンー新しい学校管理ー*	黎 明 書 房	昭 和 24 年
教育とイデオロギー	大阪社会事業短期大学「社会問題研究」	昭 和 27 年
アメリカ社会における階級と教育の問題	大阪社会事業短期大学「研究紀要」Ⅱ	昭 和 28 年
史的唯物論の教育的理解 (上・下)	大阪社会事業短期大学 「社会問題研究」	昭 和 28 年
社会問題と現代教育哲学の党派性について	同 上	昭 和 30 年
隣保館事業の意味・内容および本質 (von Marianne Welter)	同 上	昭 和 31 年
ケース・ワーカーの相談技術について(von Ruth Bang)	同 上	昭 和 31 年
長谷山八郎 (昭和11年卒)		
精神薄弱児の教育と福祉	天理大学学報 第10集	昭 和 28 年
落穂のゆくえ (精神薄弱児をめぐる諸問題)*	天理教道友社	昭 和 29 年
白痴の教育と内村鑑三	天理大学学報 第17集	昭 和 30 年
シュヴァイツァーの世界観と現代日本の教育	同 上 第20集	昭 和 31 年
武藤 俊一 (昭和11年卒)		
自己批判の倫理性	玉 川 の 丘	昭 和 26 年
全人・生活・道徳	玉 川 教 育 第4号	昭 和 27 年
実践と知性	全 人	昭 和 29 年
ペスタロッチ：キリストとその教えの瞥見 (翻訳)	同 上	昭 和 31 年
大柴 衛 (昭和12年卒)		

京都大学教育学部紀要 Ⅱ

男女共学の問題*	千代田出版社	昭和 23 年
新教育総覧*	東洋図書	昭和 26 年
ニューイングランドのピューリタン	姫路工業大学研究報告 第 1 号	昭和 27 年
Thomas Jefferson's Thought on Education	同上 第 2 号	昭和 28 年
ニューネザランドの教育	教育学研究 第 20 卷	昭和 28 年
欧米教育史概説*	理想社	昭和 28 年
北京の追憶*	駿河台書房	昭和 28 年
トマス・ジェファーソン*	学習文庫	昭和 29 年
比較教育学*	福村書店	昭和 30 年
比較教育学序説	姫路工業大学研究報告 第 4 号	昭和 30 年
二つの教育	在日米国大使館アメリカーナ	昭和 31 年
比較教育学の研究	同上	昭和 31 年
自由の無形的支持者	同上	昭和 31 年
小池 行松 (昭和12年卒)		
教育活動の構造	新潟大学長岡紀要 第 1 卷	昭和 29 年
伝達—教育学的考察—	同上 第 2 卷	昭和 30 年
教育行政における権力と人間の関係	同上 第 3 卷	昭和 31 年
東 日出男 (昭和12年卒)		
フィヒテ法概念の吟味	哲学研究	昭和 23 年
西田哲学と教育学	大分大学研究紀要	昭和 24 年
自我と所有	同上	昭和 27 年
教育哲学*	理想社	昭和 28 年
蜂屋 慶 (昭和16年卒)		
ガイダンス研究 I	人文研究 第 4 卷	昭和 28 年
過庇護と排斥	教育学研究 第 21 卷	昭和 30 年
家庭性の測定	人文研究 第 6 卷	昭和 30 年
家庭性と適応性	同上 第 7 卷	昭和 31 年
大井 令雄 (昭和17年卒)		
教育目的系列におけるスコープの位置	和歌山大学学芸学部紀要 教育科学篇	昭和 27 年
一般教育運動の諸類型	同上	昭和 28 年
一般教育と職業教育の連関への歴史的考察	同上	昭和 30 年
社会科の心理*	教育学事典 3	昭和 30 年
実験教育学*	同上	昭和 30 年
Residual School View について	和歌山大学学芸学部紀要 教育科学篇	昭和 31 年

京都大学教育学専攻卒業生著作目録

吉田 嗣義 (昭和18年卒)		
新しきいしずえ*	大分県青年団出版グループ	昭和29年
「教育二法」が社会教育に及ぼした影響	思想	昭和30年
下畑 達雄 (昭和21年卒)		
教育者の権利根拠の問題の現代的意味	教育の研究 第20号	昭和29年
教育目的の内在性と超越性	同上 第28号	昭和31年
柴田 良稔 (昭和22年卒)		
デイルタイ教育学の立場	大谷学報 第32巻	昭和28年
米国教育制度の発達とその歴史的背景	近畿大学「説苑」第1, 2巻	昭和28年
教育の場としての家庭—現代家族における 世代の対立を中心として—	大谷大学哲学会「哲学論集」第1号	昭和30年
教育原理議義*	三和書房	昭和31年
小森 健吉 (昭和24年卒)		
道徳教育の方法論的根拠としての道徳的 批判意識の調査*	平野武夫編「道徳教育の 計画とその実践」	昭和30年
学校職員組織を巡る問題—滋賀県公立小・ 中学校職員調査—	滋賀県立農業短期大学学術報告第4号	昭和31年
竹内 義彰 (昭和25年卒)		
新生活教育論のための序説	音楽大学紀要	昭和28年
教育の社会性	同上	昭和29年
職業と教育*	三和書房	昭和31年
森田 昌樹 (昭和25年卒)		
学力とその要因について	大阪市教育研究所紀要 第18号	昭和28年
学校層化について	全国教育研究所連盟研究報告集	昭和29年
子供の映画生活	大阪市教育研究所紀要 第23号	昭和31年
横田 三郎 (昭和25年卒)		
教育と政治	人文研究	昭和28年
集団主義教育の若干の問題	同上	昭和31年
安井 彰生 (昭和26年卒)		
乳児期における生長・発達について	ガイダンス 11, 12月号	昭和24年
上田 吉一 (昭和27年卒)		
適応異常児の一般的類型	姫路工業大学研究報告—一般教育関係	昭和29年
葛藤の研究を通じて見たる人格の統合性	同上	昭和30年
竹岡 幸一 (昭和27年卒)		
デューイの教育哲学の立場	鹿児島大学教育学部研究紀要 第8巻	昭和31年

京都大学教育学部紀要 Ⅲ

シュライエルマツヘルの世界観について	同上	昭和31年
大石 純悟 (昭和27年卒)		
視聴覚教具利用における実験的研究(1) —スライド学習の効果—	鳥取大学学芸学部研究報告 第5巻	昭和29年
マス・コミュニケーション・メディアの 性格と教育上の問題	同上	昭和29年
農村における職業指導のための基礎調査 —中・高校生の職業的態度—	同上 第6巻	昭和30年
視聴覚教具利用における実験的研究(2) —変容現象について—	日本教育学会中国, 四国支部会 教育学研究紀要	昭和30年
発達段階における視聴覚的方法	同上	昭和31年
放送教育による学習効果	日本放送教育学会「放送教育研究集録」	昭和31年
その一, 三形式による理解度, その二, 学習の変容現象		
視聴覚教育の基礎問題—認識過程を中心として—	同上	昭和31年
視聴覚教育におけるドラマ学習の機能	鳥取大学学芸学部研究報告 第7巻	昭和31年
岡本 武雄 (昭和28年卒)		
教科指導とカリキュラム	京都市立中学校夜間部教育の研究 5.	昭和29年
夜間生の学力調査	同上 6.	昭和30年
日記を通じてみた中学生の感情推移	同上 7.	昭和31年
牧 文彦 (昭和28年卒)		
態度の形成と美的経験について	美術教育	昭和29年
創造的経験の教育的価値について	同上	昭和30年
創造的活動に影響する諸要素	同上	昭和30年
鑑賞, 表現, 理解	同上	昭和31年
山口 透 (昭和29年卒)		
少年非行要因の教育学的分析	家庭裁判月報	昭和29年
少年非行の教育学的展開*	法曹会	昭和30年
家族と私生児*	河出書房 (現代家族講座第6巻)	昭和31年
私生児に関する若干の考察	ケース研究	昭和31年

旧 制 大 学 院

小浜 勲 (昭和19年卒)		
人間像と低学年の教育	教育計画 第1巻	昭和25年
デュ・ワイとその教養	和歌山大学学芸学部紀要教育科学篇	昭和27年
実験主義哲学の考察—新教育哲学のヨーロッパ 的背景とアメリカ的条件—	教育公論	昭和27年

京都大学教育学専攻卒業生著作目録

子供の生活における自由	教育計画 第2巻	昭和27年
実験主義の哲学とその個性論	玉川大学紀要「玉川教育」	昭和27年
個人差と指導	教育計画 第4巻	昭和27年
教育における目的としての人間	和歌山大学学芸学部紀要教育科学篇	昭和28年
実験主義教育哲学を条件づけるもの	同上	昭和29年
教育実習とその周辺—実験主義教育哲学の立場より—	同上	昭和30年
カリキュラム論	東京清明学園紀要	昭和30年
デュ・ワイの倫理説と教育	和歌山大学学芸学部紀要教育科学篇	昭和31年
石井完一郎（昭和26年卒）		
自治指導の理論と実際	ガイダンス	昭和24年
ホーム・ルームと自治会*	黎明書房	昭和25年
現代教育指導論*	理想社	昭和28年
民主社会における道徳教育（共著）*	同上	昭和30年
新 制 大 学		
井上 裕雄（昭和27年卒）		
基本記入の標目1—主記入論の検討—	図書館界 第7巻	昭和30年
基本記入の標目2—基本記入とその標目—	同上 第7巻	昭和31年
原 芳男（昭和28年卒）		
京都における集団教育への関心	教育社会学研究 第4集	昭和30年
婚姻家族の構造的分析（共同執筆）	京都大学教育学部紀要Ⅱ	昭和31年
田中 昌人（昭和29年卒）		
精神薄弱者の社会的適応（共同執筆）	教育心理学研究 第3巻	昭和31年
遠山 敏（昭和29年卒）		
女子非行少年の諸傾向	矯正教育	昭和31年
畠瀬 稔（昭和29年卒）		
遊戯療法の研究—非指示的遊戯療法の試み— （共同執筆）	児童心理と精神衛生 第5巻	昭和30年
遊戯療法について（共同執筆）	教育心理学実習	昭和31年
今立源太良（昭和30年卒）		
A new species and a new subspecies of Protura from Shikoku	Trans. Shikoku Ent. Soc., 4.	昭和31年
A new species of Protura, Acerentomon Sawadai n. sp. from Nikokn	New Entomologist, 5.	昭和31年
Two new species of Protura from Japan.	Insecta Matsumura, 20.	昭和31年
奈良県天然記念物報告 動物Ⅰ（数氏と分担執筆）	奈良県文化財保護委員会	昭和31年

京都大学教育学部紀要 Ⅲ

講 義 題 目

昭和 25 年 度

科 目	講義別	題 目	教 官
教育 学 教 授 法	講 義	教育学概論 (文共)	下 程 教 授
	〃	教育原理	鯨 坂 教 授
	〃	カリキュラム (文研究)	広 岡 講 師
	〃	教育指導	片 岡 教 授
	〃	精神衛生学 (文研究)	黒 丸 講 師
	研 究	教育の人間学的基礎 (文共)	下 程 教 授
	〃	社会科教授法 (文共)	下 程 教 授
	演 習	Dewey, J.: Experience and Education	下 程 教 授
	演 習	近世教育史	鯨 坂 教 授
	講 義	Pestalozzi, J. H. : Methode	鯨 坂 教 授
教 育 史	講 義	教育心理学	矢 田 部 教 授
	研 究	教育心理学 (文共)	正 木 講 師
	〃	教育評価	宇 阪 助 教 授
	〃	教育の社会的基礎 (文共)	末 永 助 教 授
教 育 心 理 学	演 習	教育心理学演習	宇阪助教授・末永助教授
	講 義	教育社会学	■ 井 教 授
教 育 社 会 学	講 義	教育社会学	■ 井 教 授
教 育 実 習	実 習	市内高等学校	

昭和 26 年 度

教育 学 教 授 法	講 義	教育学概論 (文共)	下 程 教 授
	研 究	教育の人間学的基礎 (文共)	下 程 教 授
	演 習	教育学の諸問題 (文共)	下 程 教 授
	講 義	教育原理	鯨 坂 教 授
教 育 史	演 習	Hopkins, Th. : Interaction	鯨 坂 教 授
	講 義	西洋教育史	鯨 坂 教 授
	〃	教育指導	片 岡 教 授
	研 究	精神衛生	黒 丸 講 師

講 義 題 目

教科教育法	演習	Kant, I.: Grundlegung zur Metaphysik der Sitten	片岡教授	
	講義	教科教育法序論	下程教授	
	〃	国語科教育法(総説)	遠藤教授	
		(国文学 研究法)	野間助教授	
		(漢文学 研究法)	小川教授	
	〃	社会科学教育法(概論)	白井教授	
		(法律学)	猪熊教授	
		(政治学)	猪木教授	
		(経済学)	岸本教授	
		(世界史)	田村教授	
		(日本史)	小葉田教授	
		(人文地理学)	織田教授	
	〃	自然科学概論(数・理科を含む)	沢瀉講師	
	〃	数学科教育法	小堀教授	
教育実習	〃	理科教育法(物理)	友近教授	
		(化学)	石橋教授	
		(生物)	芦田教授・北村教授	
		(地学)	榎山教授	
	〃	外国語科教育法(英語発音学)	小林教授	
		(英語学)	池田教授	
		(英語教授法)	中野助教授	
		(英文学)	中西教授	
		(言語学)	泉井教授	
		(西洋古典語)	松平助教授	
		(フランス語)	生島教授	
		(ドイツ語)	古松教授	
	教育心理学	実習	市内高等学校, 中学校にて実施	
		講義	教育心理学(集中)	正木教授
	研究	教育調査	苧阪助教授	
	〃	社会心理学の問題	末永助教授	
	演習	教育心理学実験演習 I	苧阪助教授・末永助教授	
	〃	行動の問題演習 II	苧阪助教授・末永助教授	
教育社会学	講義	教育社会学序説	白井教授	

昭和 27 年 度

教育学教授法	講義	教育学概論	下 程 教 授
	演習	Kant, I. : Vorlesungen über Pädagoik	下 程 教 授
教育史	講義	近世教育史	鯨 坂 教 授
	演習	Childs, J. L. : Education and Morals	鯨 坂 教 授
教育課程	研究	カリキュラム構造の諸問題	鯨 坂 教 授
	演習	Human Learning に ついて	梅 本 講 師
	〃	Wolfe, D. : Training	梅 本 講 師
教育指導	講義	教育指導	片 岡 教 授
	研究	小児の発育生理	小 西 講 師
	〃	精神衛生	黒 丸 講 師
	演習	特殊児童の個別研究	黒 丸 講 師
	〃	Kant, I. : Grundlegung zur Metaphysik der Sitten	片 岡 教 授
	講義	職業指導概論	加 藤 講 師
教科教育法	講義	教科教育法序論	苧 阪 助 教 授
	〃	国語科教育法 (国語教育諸問題)	逄 藤 教 授
		(■文学)	野 間 教 授
		(漢文学)	小 川 教 授
	〃	社会科教育法	下 程 教 授
	〃	自然科学概論 (数・理科を含む)	沢 瀉 講 師
	〃	数学科教育法	小 堀 教 授
	〃	理科教育法 (物 理)	内 田 教 授
		(化 学)	野 津 教 授
		(生 物)	中 村 教 授
		(地 学)	滑 川 教 授
	〃	農業科教育法	柏 教 授
	〃	英語科教育法	中 野 助 教 授
教育実習	実習	市内高等学校, 中学校実施	
教育心理学	講義	教育心理学概論	正 木 教 授
	研究	性格の研究	正 木 教 授
	〃	社会心理学の問題に ついて	末 永 助 教 授
	演習	Hilty, C. : Kunst der Erziehung	正 木 教 授
	〃	Guilford, J. P. : Fundamental Statistics in Psychology and Education	苧 阪 助 教 授

講 義 題 目

教育社会学	研究	Janet, P. : Les débuts de l'intelligence	末永 助 教授
	演習	Group Dynamics について	末永 助 教授
	研究	教育心理学実験演習	正木教授・亭阪助教授
	演習	教育社会学	渡辺 助 教授
教育行政学	演習	教育社会学の諸問題	渡辺 助 教授
	講義	Cook, A. : Sociological Approach to Education	渡辺 助 教授
	演習	学校管理	片岡 教 授
		教育行政諸問題	池田 講 師

昭和 28 年 度

共同研究	研究	教育学研究法	下程, 片岡, 正木教授 鯨坂, 篠原, 重松
教育学教授法	講義	教育哲学概論	下 程 教 授
教育哲学	演習	Kant, I. : Vorlesungen über Pädagogik	下 程 教 授
教育史	講義	西洋教育史(古代より)	篠 原 教 授
	研究	ペスタロッチの教育学	篠 原 教 授
	演習	Frischeisen-Köhler : Bildung und Weltanschauung	篠 原 教 授
	講義	庶民教育	猪 熊 教 授
教育課程	講義	教育課程概論	鯨 坂 教 授
	研究	Essentialism の諸問題	鯨 坂 教 授
	演習	Dewey, J. : The School and Society	鯨 坂 教 授
教育指導	講義	教育指導	片 岡 教 授
	演習	Kant, I. : Kritik der praktischen Vernunft	片 岡 教 授
	研究	精神衛生	黒 丸 講 師
	〃	小児発育生理	小 西 助 教 授
	〃	職業指導概論	加 藤 講 師
教科教育法	講義	教授法概論	正 木 教 授
	〃	■語科教育法	遠 藤 教 授
	〃	社会科教育法	下程 教授・白井 教授 田村 教授
	〃	自然科学概論(数・理科を含む)	沢 瀧 講 師
	〃	数学科教育法	小 堀 教 授
	〃	理科教育法(物理)	高 橋 教 授
		(化学)	芦 田 教 授

京都大学教育学部紀要 Ⅲ

		(生物)	新 家 教 授
		(地学)	上 田 教 授
	〃	農業科教育法	柏 教 授
	〃	工業科教育法	前田教授・堀尾教授 管原教授
	〃	英語科教育法	小 林 教 授
教 育 実 習	実 習	市内高等学校, 中学校にて実施	
教 育 心 理 学	講 義	教育心理学概論	正 木 教 授
	研 究	測定の問題	亨 阪 助 教 授
	〃	社会心理学の問題	末 永 助 教 授
	〃	学習の問題	梅 本 講 師
	演 習	要求水準の問題	梅 本 講 師
	〃	教育臨床演習	正木教授・黒丸講師
	〃	教育心理学実験実習 I	正木教授・亨阪助教授 末永助教授・梅本講師
	〃	〃 Ⅱ	〃
	〃	Guilford, J. P. : Fundamental statistics in Psychology and Education	亨 阪 助 教 授
	〃	Maucorps, P. H. : Psychologie des Mouvements Sociaux	末 永 助 教 授
	〃	Hunt, McV. : Personality and the Behavior Disorders	梅 本 講 師
	講 義	心理学概論(文共)	矢 田 部 教 授
教 育 社 会 学	研 究	教育社会学の諸問題(文共)	渡 辺 助 教 授
	演 習	MacIver, R. M. & Page, C. H. : Society-An Introductory Analysis	渡 辺 助 教 授
	〃	マスコミュニケーションと教育	渡 辺 助 教 授
社 会 教 育 学	講 義	社会と教育	重 松 教 授
	研 究	近代社会における人格形成の問題	重 松 教 授
	演 習	Litt, Th. : Individuum und Gemeinschaft	重 松 教 授
	講 義	社会学概論(文共)	白 井 教 授
	〃	博物館学	梅 原 教 授
	〃	図書館学	西 村 講 師
教 育 行 政 学	講 義	学校管理	片 岡 教 授
	〃	教育行政学の諸問題	相 良 講 師
	研 究	Supervision の諸問題	池 田 講 師
	演 習	教育行政の權威の研究	池 田 講 師
	講 義	行政学(法共)	長 浜 教 授
	〃	経済原論(経共)	岸 本 教 授
財 政 学	研 究	財政学	内 藤 講 師

講 義 題 目

昭和 29 年 度

教育学教授法	講義	教育哲学概論	下 程 教 授
	研究	教育の人間学的基礎 特に教育と政治の問題 (大共)	下 程 教 授
	〃	芸術の社会的意義	上 野 教 授
教育史	演習	Kant, I. : Pädagogik : 教育学の諸問題	下 程 教 授
	講義	西洋教育史	篠 原 教 授
	研究	啓蒙期以後の教育	篠 原 教 授
教育課程	〃	日本教育史	猪 熊 教 授
	演習	Pestalozzi, J. H. : Schwangengesang	篠 原 教 授
	講義	教育課程	鯨 坂 教 授
教育指導	研究	Essentialism の諸問題 (前年度の続き)	鯨 坂 教 授
	演習	Dewey, J. : Democracy and Education	鯨 坂 教 授
	講義	教育指導概論	片 岡 教 授
教科教育法	研究	精神衛生	黒 丸 講 師
	〃	職業指導	加 藤 講 師
	演習	Kant, I. : Kritik der praktischen Vernunft	片 岡 教 授
	〃	カント (実践理性批判) (大)	片岡教授・篠原教授
	講義	教科教育法序説	正 木 教 授
	〃	国語科教育法	遠 藤 教 授
	〃	社会科教育法	重 松 教 授
教育実習	〃	自然科学概論 (数・理科を含む)	沢 瀉 講 師
	〃	数学科教育法	小 堀 教 授
	〃	理科教育法 (物理)	木 村 教 授
	〃	(化学)	佐々木 教 授
	〃	(生物)	市 川 教 授
	〃	(地学)	速 水 教 授
	〃	商業科教育法	穂積教授・田杉教授
	〃	水産科教育法	柏 教 授
	〃	英語科教育法	小 林 教 授
	〃	市内高等学校, 中学校にて実施	
教育心理学	講義	発達心理学	倉 石 教 授
〃	心理学概論 (文共)	矢 田 部 教 授	
研究	教育心理学研究法	倉 石 教 授	

京都大学教育学部紀要 Ⅱ

教育社会学	〃	教育的人間像(大)	正木教授
	〃	教育評価の問題	苧阪助教授
	〃	社会心理学	末永助教授
	〃	学習の問題	梅本講師
	〃	小児発育生理	小西助教授
	演習	外書講読(大)	倉石教授
	〃	教育臨床実習(大共)	正木教授・倉石教授 黒丸講師
	〃	教育心理学実習Ⅰ	倉石教授・苧阪助教授 梅本講師
	〃	Correlation Methods (McNemar, Q. : Psychological Statistics から)	苧阪助教授
	〃	Maucorps, P. H. : Psychologie des Mouvements Sociaux	末永助教授
	〃	Bühler, K. : Abriß der geistigen Entwicklung des Kindes	梅本講師
	〃	Hebb, D. O. : Development of the Learning Capacity	梅本講師
	講義	社会と教育	重松教授
	〃	社会学概論(文共)	白井教授
	研究	教育と社会(大)	重松教授・鯉坂教授
	〃	教育の社会的諸様相	渡辺助教授
	〃	図書館学	西村講師
	〃	現代社会における輿論の研究	森口助教授
	〃	社会教育学	柴田講師
	〃	宗教の文化性と社会性(文共)	柵瀬講師
演習	Litt, Th. : Individuum und Gemeinschaft	重松教授	
〃	調査と統計	渡辺助教授	
〃	McComick, T. C. : Elementary Social Statistics	渡辺助教授	
〃	公教育の諸問題	永井助教授	
〃	Parsons, T. : Sociological Essays	永井助教授	
〃	娯楽の社会教育的意味	森口助教授	
〃	Mead, G. H. : Mind, Self and Society	森口助教授	
教育行財政学	講義	学校管理	片岡教授
〃	教育行政学通論	池田助教授	
〃	アメリカ教育の諸問題	アレソ講師	
〃	行政学(法共)	長浜教授	

講 義 題 目

講 義	財政学(経共)	岸 本 教 授
研 究	教育行政における人事行政の諸問題	池 田 助 教 授
〃	教育財政学(集中)	内 藤 講 師
講 義	Lasswell, H. D. : The Analysis of Political Behavior	池 田 助 教 授

昭 和 30 年 度

教 育 学 教 授 法	講 義	教育学概 論	下 程 教 授
	〃	教育学教授法	下 程 教 授
	研 究	教育と政治(次)	下 程 教 授
教 育 哲 学	演 習	Natorp, P.: Philosophie und Pädagogik (大共)	前 田 講 師
	講 義	教育哲学概論	高 坂 教 授
教 育 史	研 究	近代日本に於ける理 想的人間像形成(大共)	高 坂 教 授
	講 義	西洋教育史	篠 原 教 授
教 育 課 程	研 究	教育思想史(大共)	篠 原 教 授
	演 習	Herbart, J. F.: Allgemeine Pädagogik (大共)	篠 原 教 授
	講 義	教育課程概 論	鯉 坂 教 授
	研 究	教育の内容と方法(大共)	鯉 坂 教 授
	〃	発達主義教育の諸問題	小 田 助 教 授
	演 習	Childs, J. L. : Education and Philosophy(大)	鯉 坂 教 授
	〃	Dewey, J. : How We Think (大共)	小 田 助 教 授
教 育 指 導	〃	Smith and others: Fundamentals of Curriculum Development	小 田 助 教 授
	講 義	教育指導概 論	片 岡 教 授
	研 究	精神衛生	黒 丸 講 師
	〃	小児の発育及び生理	小 西 助 教 授
	〃	職業指導	加 藤 講 師
教 科 教 育 法	演 習	Kant, I. : Kritik der praktischen Vernunft (大共)	片 岡 教 授
	講 義	教科教育法序 説	倉 石 教 授
	〃	国語科教育法	遠 藤 教 授
	〃	社会科教育法	重 松 教 授
	〃	自然科学概 論教 理科を含む)	沢 瀧 講 師
	〃	数学科教育法	小 堀 教 授
	〃	理科教育法(物理)	高 橋 教 授

京都大学教育学部紀要 Ⅲ

教育実習		(化学)	帰山教授
		(生物)	新家教授
		(地学)	■村教授
	〃	農業科教育法	柏教授
	〃	工業科教育法	菅原教授・畑尾教授
	〃	英語科教育法	近藤教授
	演習	独語科教育法(文共)	小林教授
	〃	仏語科教育法(文共)	三浦講師
	実習	市内高等学校, 中学校にて実施	オーシュコルヌ講師
	教育心理学	講義	教育心理学概論
〃		心理学序論(文共)	矢田部教授
研究		教育における人間関係の研究(大)	正木教授
〃		測定と評価(大共)	苧阪助教授
〃		社会心理学の問題	末永助教授
〃		学習の問題	梅本講師
〃		特殊児童心理(集中)	三木講師
〃		特殊教育(集中)	糸賀講師
演習		教育臨床実習(大共)	正木教授・黒丸講師
教育社会学		〃	教育方法学(大)
	〃	Lewin, K.: Vorsatz, Wille und Bedürfnis	倉石教授
	〃	教育統計	苧阪助教授
	〃	外国雑誌講読(大共)	末永助教授
	〃	外国雑誌講読(大共)	梅本講師
	〃	教育心理学実験	苧阪助教授
	講義	教育社会学概論	重松教授
	〃	社会学(文共)	白井教授
	研究	近代社会の性格と人格形成(大)	重松教授
	〃	教育社会学序説	渡辺助教授
〃	集団と人間形成(大共)	永井助教授	
〃	家族(大共)	清水教授	
〃	社会過程における自我形成の諸問題	森口助教授	
〃	社会福祉学	柴田講師	
〃	宗教学(文共)	棚瀬講師	
〃	図書館学	小倉講師	

講 義 題 目

教育行財政学	〃	図書館学	西 村 講 師
	〃	博物館学	梅 原 教 授
	演 習	Litt, Th. : Individuum und Gemeinschaft (大共)	重 松 教 授
	〃	社会関係測定に関する研究 (大共)	渡 辺 助 教 授
	〃	社会調査実習	渡 辺 助 教 授
	〃	Parsons, T. : Sociological Essays	永 井 助 教 授
	〃	Linton, R. : Cultural Background of Personality (大共)	森 口 助 教 授
	〃	進学入試制度の研究	森 口 助 教 授
	講 義	学校管理	片 岡 教 授
	〃	教育行政法概論	相 良 教 授
	〃	教育行政学通説	池 田 助 教 授
	〃	行政学 (法共)	長 浜 教 授
	〃	経済原論第1部 (経共)	青 山 教 授
	研 究	地方教育行政組織論	相 良 教 授
	〃	近代日本政策史 (大共)	池 田 助 教 授
	〃	教育行政制度及法規研究	明 山 講 師
	〃	教育財政学 (集中)	内 藤 講 師
演 習	官僚制の研究	池 田 助 教 授	
〃	教育行政過程の研究 (大共)	池 田 助 教 授	

昭和31年度

教育学教授法	講 義	教育学概論	下 程 教 授
	〃	教育原理 (教職科目)	下 程 教 授
	研 究	教育の人間学的基礎 (大共)	下 程 教 授
教育哲学	演 習	Pestalozzi, J. H. : Über den Aufenthalt in Stanz (大共)	三 井 (浩) 講 師
	講 義	教育哲学概論	高 坂 教 授
	研 究	明治思想史の研究 理想的人間像の形成と関連して (大共)	高 坂 教 授
	〃	芸術学—美術の変遷に関する生活的考察	上 野 (照夫) 教 授
教育史	演 習	教育哲学 (教育と現代世界文化) (大共)	F. P. ハリス 講 師
	講 義	日本教育史	坂 田 教 授
	研 究	西洋教育史	F. P. ハリス 講 師
教育課程	〃	西洋教育史	前 田 (博) 講 師
	講 義	教育課程概論 (教職科目)	鯨 坂 教 授

京都大学教育学部紀要 Ⅲ

教育指導	研究	教育の内容と方法(前年度の続き)(大共)	鯨坂教授・小田助教
	演習	Childs, J. L. : Education and Morals (前年度の続き)(大)	鯨坂教授
	〃	Dewey, J. : How We Think (大共)	小田助教
	講義	教育指導概論(教職科目)	片岡教授
	研究	道徳指導の諸問題(大共)	片岡教授
	演習	Kant, I. : Kritik der praktischen Vernunft (大共)	片岡教授
教科教育法	研究	精神衛生	黒丸講師
	〃	職業指導	加藤講師
	講義	教科教育法(教育法一般)(教職科目)	小田助教
	〃	国語科教育法	塚原講師
	〃	社会科教育法	小田助教
	〃	自然科学概論(数・理科を含む)	沢瀉講師
	〃	数学科教育法	小堀教授
	〃	理科教育法(物理)	小林教授
		(化学)	岩瀬教授
		(生物)	中村教授
		(地学)	熊谷教授
	〃	商業科教育法(隔年31年度)	小野講師
	〃	水産科教育法(隔年31年度)	柏教授
	〃	英語科教育法	角倉助教
	演習	独語科教育法(文共)	三浦講師
	〃	仏語科教育法(文共)	オーシュコルヌ講師
	教育実習 教育心理学	実習	市内高等学校, 中学校にて実施
講義		教育心理学(教職科目)	倉石教授
研究		人間の成長と形成の教育心理学的研究(大共)	正木教授
〃		高等精神過程(大共)	倉石教授
〃		視聴覚教育と情報論(大共)	苧阪助教
〃		学習の諸問題(教科教育法の単位にみなすこともできる)	梅本助教
〃		社会心理学の諸問題	高瀬講師
演習		Goldstein, K. : Human Nature(大共)	正木教授
〃		外国文献講読(知的機構を中心に)	苧阪助教
〃		外国雑誌講読(学習発達心理学を中心に)(大共)	梅本助教
〃		Jaspers, K. : Allgemeine Psychopathologie (大共)	高瀬講師

講 義 題 目

	〃	教育心理学実習Ⅰ	倉石教授・苧阪助教授 梅本助教授・高瀬講師
	〃	教育心理学実習Ⅱ(教育臨床)	正木 教授・高瀬 講師 黒丸 講師
	〃	教育心理学ゼミナール	正木 教授・倉石 教授 苧阪助教授・梅本助 教授・高瀬講師
教育社会学	講義	心理学概論(文共)	矢田部 教授
	研究	発育生理学	小西 助 教授
	〃	精神身体医学	加藤(清) 講師
	〃	放送概論	稲 葉 講 師
	〃	「教育相談」の諸問題	島津 講師・山下 講師
	〃	教育心理学研究法	続 講 師
	講義	教育社会学	重 松 教 授
	研究	近代社会と教育(大共)	重 松 教 授
	〃	行動科学の問題点	永井 助 教授
	〃	入試制度の研究	重松教授・渡辺助教授 永井助教授・森口助教授
社会教育学	演習	Freyer, H. : Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft(大共)	重 松 教 授
	研究	社会調査	渡 辺 助 教授
	〃	Moreno, J. L. : Who Shall Survive ? (大共)	渡 辺 助 教授
	〃	Liesman, D. : The Lonely Crowd(大共)	永井 助 教授
	講義	社会学概論(文共)	臼 井 教 授
	研究	社会人羣学	姫 岡 教 授
	〃	社会教育の諸問題	森 口 助 教授
	演習	Fleming, C. M. : Social Psychology of Education(大共)	森 口 助 教授
	研究	家族社会学	清 水(盛光) 教 授
	〃	社会福祉学	柴 田 講 師
図書館学	〃	演劇論	山 本 教 授
	〃	映画教育	清 水(光繁) 講 師
	講義	図書館学概論	小 倉 助 教授
	研究	図書館史の諸問題・書誌学と書誌(大共)	小 倉 助 教授
	演習	図書館実務・図書分類及目録法	小 倉 助 教授
	研究	公共図書館の諸問題・地域図書館活動	西 村 講 師
博物館学	研究	博物館学	梅原教授・有光助教授
	講義	教育法規概論	相 良 教 授
教育行政学	〃	指導監督概論	池 田 教 授

京都大学教育学部紀要 Ⅱ

教育財政学	研究	学校行政論（大共）	相 良 教 授
	〃	日本教育政策史（明治中期以降）（大共）	池 田 教 授
	演習	Rolland, L. : Précis de droit administratif 中の Le régime de l'enseignement （教育制度の講読）（大共）	相 良 教 授
	〃	教育財政の研究（大共）	池 田 教 授
	〃	イデオロギーの教育学的分析（大共）	池 田 教 授
	研究	学校建築	前 田（敏男）教 授
	〃	学校調査	味 岡 講 師
	〃	学校施設	中 野 講 師
	講義	経済原論（経共）	岸 本 教 授
	研究	教育財政（集中）	内 藤 講 師

修 士 論 文 題 目

修 士 論 文 題 目

昭 和 29 年 度

岡 本 道 雄	G. H. ミードに於ける自我の問題 —教育的人間像探究の一段階—
金 谷 茂	教育価値の研究
竹 内 義 夫	特殊教育
原 芳 男	近代社会と教育

昭 和 30 年 度

稲 葉 宏 雄	デュウーイの実験的知性について
江 坂 正	ルソーの教育思想 "エミール" に於ける教育の目的とその方法について
奥 野 茂 夫	知能の因子分析的研究
古 寺 雅 男	教育的自我の構造
真 行 寺 功	心情陶冶について —ヘルバルトの場合—
遠 山 順 一	親子関係と子供の性格形成に関する一考察
中 野 照 海	教育心理学的にみた視聴覚教育の理論と適用
島 瀬 稔	Client-centered Therapy に関する予備的研究 —その理論的問題と臨床的考察—
藤 武	経験の統合性の表現性 —デュウーイにおける芸術教育の基礎について—
松 本 光 郎	社会階層と教育
安 原 宏	教育の場における性格構造の把握とその指導への連関 —性格指導インヴェントリーの作製と展開—

本 科 卒 業 論 文 題 目

昭 和 27 年 度

井 口 哲 明	教育委員会の地域教育行政単位に於ける役割と業績について
出 江 道 雄	日本に於ける P. T. A の現状とその課題 (特に京都市を中心として)

京都大学教育学部紀要 Ⅲ

井上裕雄	レファレンスワーク(参考事務)
岡本道雄	小集団に於けるリーダーシップの問題
金谷茂	経験的認識の論理的考察 —経験中心カリキュラムに於ける知識学習の方法の原理—
武田憲道	デューイの習慣説の教育的意義
遠山順一	家父長的家族反民主的の家族に於けるパーソナリティーの形成と特質
熊野淑子	新しい社会はどんな女子教育を求めめるか
野嶋セツ	女子の社会的地位と教育
原芳男	社会統制と教育
増田潔	教育財務行政組織に於ける諸問題
森田昌雄	デュルケム社会的教育説に於ける個人の主体性について

昭和 28 年 度

井戸昇二	江戸時代の我国に於ける教育
今村俊介	日本に於けるナショナリズムと教育 —明治以後の日本の教育とその背景—
稲葉宏雄	デュウイの習慣論と教育
内山一雄	教育勅語成立の歴史的背景
大西匡哉	人間に於ける興味の発達の特質に関する一考察
鴨井慶雄	教師・生徒の人間関係の一研究 —生徒のもつ対教師経験の調査—
源城恒人	現代我が国に於ける青年期のマスコミュニケーション活動
古賀輝次	大將軍小学校給食返上運動の分析—教育行財政と政治
小嶋一夫	新しいカリキュラムにみる地域性の原理と学習内容について
古寺雅男	自我の本質と教育 —フィヒテの教育思想研究—
小西寛一	フリッシュアイゼンケラーの教育学の問題
西頭三雄児	Natorp における教育的自由について
齊藤省三	経済的見地よりする近代教育の性格
佐藤堯子	リーダーシップと社会的風土 —教師と生徒の関係を中心として—
佐藤浩一	原始社会に於ける人格の形成
沢田寿栄雄	農村社会における態度の形成
関弘道	植民地時代におけるアメリカ教育に関する一考察(ニューイングランドを中心として独立戦争まで)

本科卒業論文題目

高田 栄 藏	我が国教育の民主化の一原理についての考察 —教育の機会均等の原理—
田中 昌 人	胎児に対する教育に就いて — (Schwangerschtoxikose の母親から生れた子供の生育史的追跡を基礎にして)
遠山 敏	児童の問題解決学習に関する実験的研究
戸村 惇 夫	親子関係の心理学的構造について —教育的考察—
中内 敏 夫	人格形成と技術
中野 照 海	聴視覚教育の基礎的問題
西村 芳 澄	The principle indiscipline (しつけの原理)
野村 庄 吾	集団の凝集力について
畠 瀬 稔	患者中心療法と教育
飛田 芳 郎	日本に於ける近代教育制度とその教育思想について
藤田 雅 量	社会的態度の一研究 —社会規範と偏見—
船岡 三 郎	小中学校児童の日常家庭に於ける学習意欲に関する研究
松本 光 郎	コミュニティスクール理論の一考察
三宅 芳 弘	幼稚園児に於ける基本的習慣の形態に関する一研究
安原 宏	教育臨床に関する試論 —問題児に悩む教師のカウンセリング—
山根 杉 恵	我が国に於ける知能検査の現状
山本 勝 三	新聞がもつ教育的役割について —新聞の公共性を中心とした一般的考察—
吉田 寛	集団活動の分析 —参加 (Participation) の問題を中心として—
脇 淳 二	ジョン・デュウィによる教育方法論
渡部 修 三	集団過程の一研究 —集団の凝集力について—

昭和 29 年 度

五十川 勉	精神電流現象による Personality の研究
今立 源 太 良	大阪舎密局大阪理学校大阪開成所分局理学所について
太田 祐 周	ルソー教育学に於ける根本問題 —特にその消極的教育を中心として—
大槻 隆 司	精神電気反応による誘意性の一考察
大庭 徹 美	教育二法案に関する二、三の問題

京都大学教育学部紀要 Ⅲ

笠原克博	デューイに於ける教育の目的について
桑門豪	同和教育に関する一考察
佐藤泰三	精神薄弱児指導における問題の二、三 —教師と生徒の人間関係を中心として—
酒井汀	学級における人間関係と集団規範
清水俊彦	教育行政過程の一考 —その過程における行政権威は如何にあるべきか—
杉浦美朗	デューイに於ける経験と教育
長島典明	継子の心理について
西村昇	助言指導計画序論 —助言指導計画に於ける技術とその原理に関する考察—
野村芳平	ルソーの教育思想における「自然」
新添保	デューイの習慣論についての一考察 —その人間論における習慣の問題—
浜田吉久	デューイの教育説におけるインタレストと努力
浜辺一彦	公共図書館における図書選択について
福田雄次	ロバートオウエンに於ける社会改造と教育
福原亨	認識の存在拘束性の省察 —マンハイム知識社会学研究ノート—
前田文次	デューイ教育学における民主主義の意義
村川紀子	知能における男女差
山名義韶	集団の効果の実験的研究 —特に共同的集団作業状況における集団の効果について—
山中巖	進歩主義とその背景
山田昌之助	語の理解と発達段階
吉田瀬延	ベスタロッター教育学に於ける合自然的陶冶についての一考察
和田修二	ニーバーに於ける人間と教育 —悪の問題と教育—
矢島俊明	Rumor の実験的研究
森野礼一	マスコミュニケーションの心理的障害

昭和 30 年 度

安達一彦

英国の学校発達史

本科卒業論文題目

新井英彦	G. H. ミードに於ける社会化の理論 —自我面よりみた社会化過程—
井上信行	社会政策としての教育行政 —教育行政に於ける規制の問題—
稲田豊	集団規範としての人間関係
上田保雄	勤労青少年教育における余暇利用の問題 —京都近郊紡績工場の青少年調査—
大門隆	戦後の教育改革についての—考察
高比良房子	近代家族における男子の不適應
小野栄	問題児の事例研究
川口茂雄	暗示効果を阻害する集団決定の影響
北村寿平志	我が国上代における学校制度について
柴野昌山	T. パーソンズに於ける「逸脱行動とその社会的統制」について
諏訪公一	義務教育における性教育とそのカリキュラム
谷川守正	ベルジャエフの実存的人間像
高藤哲英	経験主義教育における学習と教材
長巖	デュ—イの教育学についての—考察
辻村昌三	高等学校学区制についての調査研究
西岡忠義	集団過程におよぼす協同と競争の効果 —集団過程の分析に関する予備的実験集団による問題解決の諸相—
沼田敏	森有礼の国家主義的教育政策 —森有礼をめぐる明治の教育—
橋本順明	前旭ヶ丘教育に於ける平和思想とその実践
富士貴志夫	社会統制と身分集団
藤本浩之輔	社会化に関する—考察 —期待と役割を中心とした—
松井春満	カントに於ける回心の教育論的考察 —形成されるべき自由人格の構造—
松本昌三	メルヴィル, デュ—イについて
三島修	教科教育法の心理学的考察 —英語指導要領の二, 三の問題点—
西名盛之	Psychological Stress の好醜球に及ぼす影響と Personality factor との関係について

Abstract of Kyoto University Research in Education

Volume One, Volume Two, and Volume Three

Editors : Michio Nagai and Frederic P. Harris

《 Volume One 》

The Principle of Unrepresentability

Yūkichi Shitahodo

In the opinion of the writer the "principle of unrepresentability" is the first fundamental principle in the study of education. What it means is this: a man lives, experiences and grows, but nobody can take his place in living, experiencing and growing. Each person lives in his own unique life space (Lebensraum). And he has his own unique capacity to integrate his own experience. Such other important educational principles as the respect for individuality, learning by doing, participation in social life and the problem solving method may be derived from this first principle.

Educational Administration and its Standpoint

Susumu Ikeda

We must understand the character of educational administration as public administration proper. Before we discuss educational administration as a marginal situation between politics and administration, we must secure its functional neutrality as a management phenomenon from the point of view of public administration proper. Administrative problems in education are, in the opinion of the writer, actually managerial problems.

A Research Study on the Asahigaoka Middle School's Affair

Kenji Moriguchi

A group of fifteen parents who had sent their children to the Asahigaoka Middle School presented a protest to the Kyoto Municipal Board of Education in December 1953. The protest pointed out that education in Asahigaoka had three important defects: (1) a laissez-faire attitude in the training of manners, (2) a low level of educational achievement, and (3) political education inclining towards the left. The Board accepted the appropriateness of the protest, and warned the school accordingly. Many teachers, however, rejected this warning, and the Kyoto Teachers' Union supported the principles of Asahigaoka education as constitutional. Meanwhile, the school was closed. It was occupied by the Teachers' Union in May 1954. The Board opened another Asahigaoka school at Okazaki in Kyoto.

Thus the original school was split into a Union School and a Board School. 61 % of the parents sent their children to the latter, 27 % sent them to the former, and about 10 % absented their children from school. In this research study, we have tried to analyse the causes and course of this affair mainly through opinions of parents.

Similarity and Familiarity Scales of Japanese Adjectives

Takao Umemoto, Yasuo Morikawa and Masao Ibuki

Similarity and familiarity scales of Japanese adjectives were measured by three procedures; (1) association of similar words, (2) a rating of the similarity grade of adjective pairs in a five point scale, (3) a rating of the familiarity grade of adjectives in a five point scale. Subjects were all students of Kyoto University. Time allowed for association was twenty seconds. The following items and numbers were recorded in this list :

1. Stimulus words.
2. Number of varieties in response words.
3. Number of subjects who made response with the word as the first association.
4. Total of subjects who made responses to the stimulus word.
5. Number of subjects who made response with the word during the twenty seconds association period.
6. Total of response words.
7. The median of the similarity scale.
8. The quartile of the similarity scale.
9. The median of the familiarity scale.
10. The quartile of the familiarity scale.

《 Volume Two 》

A Comparative Study of Articles on Education in the Constitutions of Different Countries

Iichi Sagara

The purpose of this paper is to compare articles on education in constitutions of nearly all the countries, that is eighty-five of them, in the world. Generally speaking there are only a few constitutions which do not contain such articles. The articles on education are included usually in a Bill of Rights within the constitution. The reason for this is that education is one of the basic and most important of human rights. More and more even the details of educational affairs tend to be included in these articles. Such a trend can easily be detected in more than one half of the contemporary constitutions which have been either enacted or revised since the end of the Second World War. Two reasons may explain why this trend is becoming stronger. First, education has in recent times seemingly been respected in most countries. Second, the responsibilities and functions of the state in

A b s t r a c t

respect to education have come to be strongly recognized. The following fifteen subjects are chosen in order to find similarities as well as differences in the articles of education. They are freedom of education, academic freedom, the right to enjoy education, compulsory and free education, education and religion, private education, family education, the organization of educational administration, educational finance, educational objectives, teacher personnel, women's education, language and education, the protection of cultural treasures, and special programs of education. On the basis of this comparison the articles of the different countries are divided into groups. Interestingly enough striking differences are found in the characteristics of educational articles between the free countries and the countries which belong to the Communist or so-called "People's Democracies." For example, large differences are found between these two groups of countries in the content as well as in the method of treatment of such subjects as freedom of education, academic freedom, religious education, family education and so forth. These differences are due probably to the fact that programs in education are under the strong influence of the political ideologies of the respective countries. It is the belief of the writer that such a comparison as that attempted here will prove to be fruitful and promising in the study of comparative education as well as in the comparative study of constitutions.

The Contents and Methods of Education

Tsugio Ajisaka

The attempt made in this brief paper may be called a typological approach to theories of contents and methods in education. Its purpose is to gain some knowledge about the background of the progressive education which greatly influenced Japan during the post-war period. To do this the writer, like many others, has paid attention to John Dewey and his followers. At the same time he thinks that any single philosophy is always formed not by itself but always with reference to many other philosophies, including those especially in opposition to the philosophy being developed. Thinking that this is particularly true with the philosophy of progressivism, which has been the shining light of twentieth century education, he has examined essentialism and perennialism in relation to progressivism. A helpful guide for such an approach, the writer thinks, is *Patterns of Educational Philosophy* by Theodore Brameld. The writer on the whole agrees with Brameld except for the following two points: In the first place, the writer thinks that one should be careful about the use of the term "philosophy" by Brameld. But the writer hopes that he himself is not misconstruing the significance of Brameld's own intention. Secondly, the writer is interested in the methodology of essentialism, especially in the method of thinking developed by Morrison.

In Section One the position of progressivism is examined with particular reference to the characteristics of experimentalism. In Section Two the position of essentialism is discussed in relation to the exposition of H. Morrison's theory of the method of learning. In Section Three some positive aspects of the position of perennialism are pointed out.

These are summarized in a consideration of problems concerned with the relationship between that which changes and that which is constant, with the relationship between the past, the present, and the future. This part of the discussion is much indebted to A. N. Whitehead. The objectives of the foregoing three theories of education are integrated in a direction suggested by reconstructionism. Even essentialism has its place as a theory of method in this integration. Lastly, it is argued that the contents of the curriculum are based on the educational reality which emerges at the place where the developmental process of the child, the social situation, and the historical current meet.

The Structure of Empathic Communication as Viewed from the Standpoint of Educational Psychology

Masashi Masaki

1. There emerges in the educational process between teacher and pupil a human relation which may be called "empathic communication." It is basic for human growth. Although there is little doubt about the emergence of such an educational experience among superior teachers, its analysis is extremely difficult. However, an inquiry into its structure is strongly required since it is one of the basic problems in educational psychology.

2. The first point of inquiry is to find a sphere in which empathic communication is formed. It can be found neither in the realm of unconsciousness as defined by S. Freud nor in the peripheral sphere, "das Sphäre," as defined by E. Kretschmer. A sphere called "spirit" (Geist) has to be taken up for consideration. This is a sphere which has been neglected in the history of psychology. But it now has to be considered as an important problem even for extremely practical purposes such as the improvement of psychotherapy. This "sphere" is especially important for the discussion of empathic communication among people in educational practice. The "spirit" though different from "body" and "psyche", when integrated with the latter, forms a sphere in which the emergence of empathic communication can be found.

3. The second point of inquiry is a concern with the conditions for the change which is brought about by empathic communication. Some are the conditions of maturation, others are social conditions. However, since the focal point of interest is the inquiry into the processes of ego-insight and of ego-perception, the psychological structure of these conditions is primarily considered in this study.

4. Changes brought about within a person by empathic communication are at the same time changes in value consciousness. In the third point of inquiry an attempt is made to find out what these values are and to analyse the anxiety which is an important condition for the emergence of these values. In other words the third point discusses the ways in which a person overcomes anxiety and enhances his inner growth of personality.

5. In point four of the inquiry a program of educational method is taken up to find ways by which to enhance this inner growth of personality through empathic communication. The teacher's personality and attitude are important conditions for such an educa-

A b s t r a c t

tional method. In his recent book, Professor A. T. Jersild also takes up this problem as one for the personal concern of the teacher. In this present study quotations are also made from two outstanding teachers in order to clarify the nature of the subjective conditions which are conducive to the emergence of empathic communication.

A Structural Analysis of the Conjugal Family

Michio Nagai and Yoshio Hara

In present day Japan there is much discussion as to whether or not we should maintain the "new family," sociologically called the "conjugal family," prescribed by the new constitution. However, since the arguments pro and con are colored by wishes and hopes and are not determined by a scientific understanding of this type of family, there is much confusion and ambiguity. This paper attempts only to clarify some of the basic structural aspects of the system without attempting to suggest any definitive policy in regard to its maintainance or abolishment. The analysis is influenced largely by that of Talcott Parsons in an essay on this subject in his *Essays in Sociological Theory* and also by Parsons and R. F. Bales, *The Family*.

1. **The conjugal family in the kinship system.** Even the conjugal family does not exist by itself but is related to other conjugal families. So a unique kinship system is formed out of the combinations of many conjugal families. There are four major characteristics in such a kinship system : (a) the separation of the family of orientation in which a person is born as a child from the family of procreation which he or she establishes with his spouse upon marriage ; (b) the structural importance of marriage by which is meant the priority of the marriage principle to any other kinship principles such as the descent line, sex difference, and age order ; (c) multilineality of the system, that is, any line of descent both in the ascendance and descendance of each side of the couple is considered equally important ; (d) consequently, the openness of the system, in other words, that every marriage brings together not only two persons of different families of orientation but also consanguine relatives of both parties.

2. **Relationship between the occupational system and the conjugal family.** Both the emergence and structure of the conjugal family are directly related to the structure of the modern occupational system. Two points are made in this connection. First, the separation of each conjugal family from other conjugal families is facilitated by the high mobility both horizontal and vertical of the modern occupational system. Second this in turn is related to the multilineality principle in which both male and female members are treated equally. In other words since the marriage is the only bond in the separated conjugal family, the wife is considered as an important and indispensable partner of her husband. Although it is often said that the increase of female workers in the occupational system has helped to equalize the kinship status of both sexes, the facts seem to indicate that this is not too important.

3. **Structurally defined human relations in the conjugal family.** The structure of the

conjugal family is such that unique human relations are formed in the system. Two examples are given. First, differentiation of the sex role is required by this system. Since the conjugal family is a small unit where occupational activities are sharply segregated from household affairs in contrast to the large family in which both are combined, the separation of sex roles becomes necessary. Consequently, contrary to the common notion that both men and women play the same role in modern society, the occupational role is nearly exclusively carried on by the husband, "the breadwinner," while the homemaker role is played by the wife. Second, the obligation "to be in love" is important. The family of procreation is sharply broken away from the family of orientation causing a great strain for the member leaving the latter. Since this feeling of strain could weaken the solidarity of the family of procreation the obligation "to be in love" is structurally indispensable to maintain the unit's integrated character.

Some Analytical Studies of Mental Abilities

Ryōji Osaka and Shigeo Okuno

Experiment I

We have already made a factor analysis of a natural group, using samples which had previously been chosen for the purpose of the standardization of the Kyoto University NX9-15 Intelligence Test. (See Bibliography of the test). For this experiment the same samples were regrouped into two sets. The first set is composed of the "O" (old) group and the "M" (middle) group. These two groups are the same in the distribution of the standard scores ("SS") but different from one another in chronological ages ("CA"). The second set is composed of the "OB" (old bright) group and the "OD" (old dull) group. They are the same in CA but different from one another only in the mean for SS. A factor analysis was made for each of these groups separately. (See Tables 7 to 26 of the present report). Little significant difference was found between the structure of factors in the natural group which was studied previously and that of each of these groups. In both cases the following following four factors were analysed: "G" (general reasoning); "V" (verbal); "S" (spatial); "N" (number). The structure of factors in this intelligence test does not change according to the difference in mental ability and that in CA. In other words, differentiation in mentality is not recognized in this respect. However, the element of communality increases in proportion to the increase of CA. Some sex differences are found in the factors N and V.

Experiment II

Standardized achievement test were given to eighth grade children in the following subject matters: Japanese language, social studies, mathematics, science, and English. The results of the tests were compared to the scores of the sub-tests within the Kyoto University NX9-15 Intelligence Test. (See Table 27 and 28). Correlation matrixes were formed out of this comparison. (See Tables 29 and 30). The correlations between different

A b s t r a c t

subject matters were much higher than we expected. Viewed from the standpoint of factor analysis some subject matters with reference to the loading of S, N factors have special characteristics. However, in general, no special factor characteristic was found in any of these subject matters. This is probably due to the fact that the G factor is strong and to the nature of the evaluation form of the achievement test.

《 Volume Three 》

The Educational Function of Beauty (I)

Masaaki Kōsaka

The purpose of this paper is to clarify the philosophical foundation of art education. Only the first half of the treatise is included in this volume; the latter half will be forthcoming in a later issue.

What the writer intends to discuss is the function that beauty plays in the formation of personality, and the meaning it has in the education of man. It becomes immediately necessary, however, to define what beauty is before we discuss its function, for beauty has been defined in innumerable ways by scholars in different fields such as philosophy, esthetics, and art. At least five ways of thinking about beauty can be distinguished: the idealist who defines beauty as harmony; *Lebensphilosophie* in which beauty is considered as the enrichment of life; the existentialism which finds beauty in the transcendental realm; those aesthetists of the school of *Kunstwollen* who find beauty a force in historical formation; and lastly, those who regard beauty as a criticism of living.

These five ways of looking at beauty represent in the opinion of the writer, five functions or dimensions of beauty. Each dimension has its characteristic as well as its limitation and is related closely to other dimensions.

In the present volume only the first three of these five dimensions are discussed while the remaining two will be discussed subsequently. The first originates in Greek philosophy which regarded beauty as harmony. This notion was to a certain degree retained by Kant; however, Kant modified the Greek notion of harmony in the sense that he found beauty in the subjective consciousness, while its place was considered on the side of objective reality in Greek philosophy. This Kantian notion was modified by Schiller, who, however, regarded beauty as a harmony between sensation and reason. The fact that the place of beauty was found to be in the mind of the subject both by Kant and Schiller is important when one considers its educational function. The purpose of art education from this standpoint is to harmonize sensation and reason. At the same time this means the full development of human personality. The famous statement by Schiller should be understood in this context: „*Der Mensch spielt nur, wo er in voller Bedeutung des Worts Mensch ist, und er ist nur da ganz Mensch, wo er spielt.*” Although a partial truth is found in this notion of beauty by Schiller, it has the following two limitations: the fact that beauty was regarded as *Schein* which is not reality itself while some beauty undoubtedly resides in reality; and

the fact that beauty was considered to be harmony, while we can find beauty in deformed disharmony.

The second position, *Lebensphilosophie*, in contrast to the first, finds beauty not only in perfection and harmony but also in deformation and disharmony. Even when life (Leben) is deformed, beauty can be found in it, because from this very fact it becomes vigorous and looks for a constant enrichment of itself. So beauty is the depth and width of humanity which emerges in this constant search for its emancipation in life. Artists are explorers of the possibilities of life and the adventurers and wanderers of life. However, the following two limitations are again found in this position: first, this position, although it promised to find beauty in reality, only sees it in the possibilities of life but not in the reality of life itself. Secondly, it only makes man a wanderer among various possibilities of life without training his ability for decision and responsibility.

While the second position sees beauty as imminent in life the third position, that of the existentialist, regards beauty as a motivation which invites man to the transcendent. For example Dostoevsky states as follows in *The Brothers Karamazov*: "Beauty is a terrible and awful thing! It is terrible because it has not been fathomed and never can be fathomed, for God sets us nothing but riddles. Here the boundaries meet and all contradictions exist side by side The awful thing is that beauty is mysterious as well as terrible. God and the devil are fighting there and the battlefield is the heart of men."

Beauty thus is a place where there is a struggle between the orientation to God (transcendence) and the orientation to the devil (transcendence). So beauty is found when an attempt is made by man to face transcendence and a man becomes a man in the true sense only when he does in fact face transcendence. Hence the educational function of this beauty becomes meaningful.

Again there are two limitations in this position. First, although beauty as transcendence helps man to face transcendence, it does not invite him to decide to face transcendence. So beauty as transcendence only anticipates the latter. Secondly, this position tends to bring man into confusion and sometimes makes him think he is in the transcendental realm while he is actually in confusion.

The Factor Construction of the Social Maturity Test

Seichi Kuraishi

The purpose of this study is to throw light upon the type-factor of the social maturity items (of the Social Maturity Scale we have used) in order to identify our scale.

With respect to the problem of basic abilities which form sociality, many workers have recognized the validity of Doll's 6 categories of infant sociality. But these 6 categories alone, it would seem, are not necessarily valid in the measurement of sociality of school-age children.

This investigation was designed to clarify the factor-construction of the Social Maturity Test which was standardized by Gumma University.

A b s t r a c t

approach should become central in the contemporary study of education.

In the next article "Developmentalism in Education," *Takeshi Oda* puts forth his own approach in the study of education. According to him, developmentalism in education intends to give learners opportunities of learning gauged to their growth and maturity. By so doing, each individual is developed to the highest possible degree, thus contributing to the constant renewal of a free society.

"On the College of Education," however, *Iichi Sagara* treats the problem of this section differently from any of the previous writers. As a scholar in the field of educational administration, he first examines the legal bases on which the college of education should be constructed. Upon the examination of the legal bases, he says, it is found that there is no legal restriction with reference to concrete aims and tasks which should be held by those colleges of education which are part of the former-imperial universities. So he insists that each of these college should construct its unique program as soon as possible. And he himself thinks that one unique program may be formed when a unique nature of educational sciences is generally accepted by the members of the college. This unique nature, in his opinion, is a normative aspect of educational sciences.

In order to settle these various complications in the study of education, *Yūkichi Shitahodo* proposes his own paradigm. The title of his article clearly shows his intension. It is called "A Tentative Proposal on the System in the Study of Education." Viewing education from an anthropological standpoint, he places each of most influential approaches in the following paradigm. This paradigm is influenced by R. Ulich.

The Study of Education

From above (God, Value, Freedom)	From below (State, Society, Life)
The Study of Religious Education: <i>homo religiosus</i>	The Studies of National, Militaristic and Political Education and the Science of Education; <i>homo politicus</i>
The Idealist Study of Education: <i>homo sapiens</i>	Social Education: <i>homo socialis</i>
The Studies of Humanistic Education and Culture Education: <i>homo loquens</i>	The Existentialist Study of Education and Pragmatism: <i>homo faber</i>
The Study of Character Education: <i>homo moralis</i>	The Materialist Study of Education: <i>homo naturalis</i>

Again in "The Meaning and Function of Education," *Tsunzo Takase* examines the place of science in the study of education. This is done, in the case of this writer, by analysing first the meaning and function of education. According to him, education has two aspects, the one being cultural facts and the other the dynamic process of the formation of human personality. When educational sciences deal with the former, they are not different from other social and behavior sciences. However, when they treat the latter, they are bound to face normative problems. The writer concludes that the uniqueness of educational sciences may be clearly realized when these dual aspects of educational function have been correctly recognized.

In the following article entitled "The Study of Education in the College of Education and the Teaching Profession" *Michio Nagai* takes up the same problem of the place of

science in the study of education. In contrast to *Umemoto* who points out similarities and differences, *Nagai* compares the teaching profession with such other professions as doctor, engineer, and architect. It is easily found that the teaching profession has relied, unlike the others, more upon the broad culture and personality. It is for this reason, he says, that humanistic studies should be regarded just as important as the science in the study of education.

The next article "The Place of Explanatory Sciences in the Study of Education" by *Kenji Moriguchi* also appraises the scientific approach in the study of education. At the outset he contrasts normative science with explanatory science and emphasized the fact that the latter has become increasingly important in the study of education. Further, he enumerates some of important achievements in the fields of psychology, sociology, and cultural anthropology. He says, however, that it is just as dangerous to overestimate them as to underestimate them.

"A Problem in the Educational Sociology" by *Toshiaki Shigematsu* is quite similar to the article by *Takase*. Both of them point out the double nature of the function of education and of the science of education, the only difference being the fact that *Takase* discusses the problem as a psychologist, while *Shigematsu* does so as a sociologist.

For last two years *Frederic P. Harris* has been an exchange professor from the Western Reserve University in the United States. In his "Problems of Teacher Training in the United States" he points out three important phases of teacher training in the United States. The first is the conflict between the traditional liberal training and the contemporary scientific training of teachers. The second is the necessity for the improvement of economic conditions in the education. The last is the increasing awareness of the importance of the professionalization of teachers.

The last article "On the Personality" by *Hitoshi Kataoka* is different from any of the previous articles in its unique approach to the study of education. His is done exclusively from the philosophical standpoint. In the first section he examines the merits and limitations of Kantian philosophy with reference to the study of man. Then he puts forth in the second section his own philosophy of education which is based in Buddhism, especially the philosophy of the *Zen* sect.

The Educability of Virtues

Masami Kasao

Is it really possible that a eminent man like Pericles can teach others the reason why he is more eminent than they are? Each greek philosopher studied this question in his own way, but no one, in my judgement, has yet resolved in a pedagogical frame of reference. Indeed, someone who is regarded by others as a man of eminence must have some excellent trait, but what exactly is this? And, should he really have any excellent trait, whence has he learned it? Can he teach it to others? Three questions follow: (1) what are the excellent traits; (2) how can a man learn them?; (3) can he teach them to others?

A b s t r a c t

To answer these questions, the present study has started off from the problems of *technique and experience*. Aristotle distinguished the one from the other. According to him, technique is based upon the cognition of causes and effects, while experience is not. In other words the former is based on *logos*, while the latter is not. For this reason once technique has been universalized through *logos*, it is communicable and public. In contrast to this, experience has no *logos*, hence it is always without any universal theories. It is uncommunicable and unteachable. But there has to be some way to treat this uncommunicable and unteachable realm of human experience, especially when we are engaged in the study of education. This problem will be discussed in the forthcoming paper.

The Authoritarian Personality and Parent-Child Relationships

Jyunichi Tōyama

In post-war Japan the principles of the institution of the family have been changed from the patriarchal to the democratic by the new constitution. But in actual life a considerable number of the features of the patriarchal family remain, and hence various confusions about the parent-child relationship are arising. The purpose of this brief paper is to consider the influence which the patriarchal and the democratic parent-child relationships have upon the personality-formation of the child, and to find out the fundamental direction of attitude which we should take toward the problems of parent-child relationships. This analysis is influenced largely by T. W. Adorno, E. Frenkel-Brunswik, D. J. Levinson and R. N. Sanford, *The Authoritarian Personality*.

The contents of this paper consist of (1) the Problem, (2) the Authoritarian Personality, (3) Patriarchal and Democratic Parent-Child Relationships, (4) Parent-Child Relationships and Personality-Formation, and (5) Conclusion.

Freedom and Love in Education

Michio Okamoto

In this paper I will attempt to analyse what Reinhold Niebuhr's doctrine of man may suggest for education in our time. My reason for examining Niebuhr's views in this respect is that in America after the depression of 1929 many criticisms were directed against the prevailing pragmatic conceptions and Niebuhr's thought is representative of those criticisms. I think, furthermore, we may find in Niebuhr's thought a key to a clearer understanding of the problematic points of post-war education in Japan which has been greatly influenced by this pragmatism.

The current plan of education, the so-called "new education," has put extraordinary confidence in the spontaneity or freedom of the child. In opposition to the old authoritarian education which disregarded the subjective need and creativity of the child, this new education replaced compulsion with freedom. In its emphasis upon freedom, I think, two meanings are included: one is the idea of the creativeness of freedom, and the other is

the idea of intelligence which gives freedom the power of self-control.

Thus the focus of my attention is turned to these two meanings of freedom, and through these I have tried to examine whether freedom in itself should be trusted in the way the new education claims. My paper is divided into three sections.

1. In the first section I describe Niebuhr's contention that freedom implies destructiveness as well as creativeness. And I concluded that freedom, therefore, is not a virtue in itself and that in order to revive creativeness truly, an adequate measure should be taken against destructiveness.

2. The purpose of the second section is to examine whether or not intelligence is effective as an adequate measure. The conclusion is that it has considerable effectiveness in personal relations within groups but it is powerless against "collective egotism" between groups.

3. In the last section, I insist, as Niebuhr does, that a final adequate measure against destructiveness is love, in other words "Agape," in which one might be able to achieve self-realization in others through self-giving, to develop the "I and Thou" relations, and thus to revive the creativeness of freedom. I conclude that in education we should set the man of love as the ideal human image instead of the man of freedom and that we should achieve this through teacher pupil relations. In the last section I summarize Martin Buber's theory of education as an application of Niebuhr's thought.

Some Experiences with Play Therapy and its Problems **—A Study of Play Therapy: Report II**

Minoru Hatase

Recently, experiments with the method of direct treatment of problem children have been increasing in our country. Since 1954, we have been trying child-centered play therapy or nondirective play therapy, though in some respects we have had to modify this method in adjusting to the particular clinical institution. This report is the inclusive description of our experiences in the years 1955 and 1956. I have concluded that this method has promise for treating children and counseling parents. Child therapy is placed at the focus of the treatment. The main considerations are as follows:

1. Through the evaluation of the results of the therapy and the follow-up, play therapy can be considered effective for child neurosis. This appears especially to be the case for the stuttering and withdrawn children we have treated.

2. A therapy period of more than 6 months and including 20 interviews appeared to be necessary.

3. Through the analysis of interrupted cases, I have concluded that the following factors cause discontinuation of this therapy: (1) the problem of how to emotionally accept the children and the parents; (2) the problem of how to adjust the therapist's method to the internal frame of references held by the children and the parents; (3) the problem of how to inform the parents of the meaning of the symptoms and the therapeu-

A b s t r a c t

tic method.

4. The process of therapy was mainly influenced by the degree of the motivation of the child who participated in the therapy. In some cases, we could notice clearly the children's change in the therapy room faster than in other situations.

5. As to the method of counseling with parents paralleling the child's therapy, I think it is necessary to develop the information technique in client-centered and group-centered counseling.

6. When environmental influences exist, play therapy is not fully effective without counseling with parents. If we can't continue the counseling with parents, it will at least be necessary to inform parents of the reactions of the children in the therapeutic process.

After examining our experiences, I pose a few research problems concerning the methodology of the therapeutic process and the measurement of the therapeutic change.

Dewey and Marxism

Hiroo Inaba

At present Marxist criticism of pragmatism in Japan, especially that of Dewey, is aggressive in character but poor in content, for its criticism, understandably, is saturated with excessive ideological bias. This paper, it is pointed out in Section One, aims to examine the similarities and differences in the theory of Dewey and Marxism, confining the problem to the knowing process and the problem of knowledge.

In Section Two, the problem of reality in Dewey and Marxism is studied. While Marxism starts from "matter" in delineating its problem of reality, Dewey, of course, starts from a "nature" that is dynamically developing. In his opinion the consciousness and intelligence of human beings are a function and a product of "nature." His position therefore is not a mere subjective idealism as alleged by Marxists.

In Section Three, through a comparison of Dewey's *The Theory of Inquiry* and Mao Tse-tung's *On Practice*, the methodological similarity of the knowing process in Dewey and Marxism is studied. In Dewey inquiry arises from the problematic situation and ends in problem-solving through a reconstruction of the situation. Knowledge is constructed as the outcome of inquiry. The process of inquiry is constructed with both a sensational factor and a rational one — with both observation and hypothetical idea — and both are integrated in practice which aims to test the hypothesis and the reconstruction of the situation. In Marxism Knowledge is the reflection of nature and society. Generally speaking, the developmental standpoint of the epistemology of Marxism, such as Mao Tse-tung holds, is that the knowing process develops from a sensational stage to a rational one, and both are integrated in practice which aims to test the exactitude of the reflection and the revolutionary change of the objective world.

In Section Four, the character of knowledge and of truth in Dewey and Marxism is studied. In the former knowledge is a consequence of inquiry and has relative character as a source of hypothesis and as an instrument for further inquiry. It rejects absolute

truth. But in the latter absolute truth has its existence in the law of the objective world which exists independently of human beings. The knowing process is an endless process approaching this objective and absolute truth.

Some Studies of Deviant Behavior and Social Control

Shōzan Shibano

It is very difficult to define "deviant behavior." The most plausible definition is the following: "Deviation is behavior that is socially disapproved." But all socially disapproved behavior is not deviant. For example, in present day Japan although principles or norms of communism are socially disapproved by our institutions, there are some who do not regard communists as deviant. As a result there is much confusion and ambiguity about the concept of "deviant behavior." This paper attempts only to make a basis or a conceptual scheme for clarifying this concept. The analysis is influenced by that to Talcott Parsons and is carried out in the following context:

1. Deviation from social norms or institutionalized expectations disturbs the equilibrium of the social system.
2. Deviation takes place in a task-performance process in a situation.
3. Deviation influences the equilibrium of a personality system in a situation and differentiates into many patterns according to objects of orientation and directions of action.
4. Since deviation is apt to disorganize a system, it must be regulated by social control. The fundamental forms of social control are found in the mechanisms of psychotherapy.
5. In short, social control limits deviation, while task-performance stimulates it.

編 集 後 記

ここに漸く紀要第三号を刷ることができました。私自身の不慣れと不手際から、刊行が予定よりも遙かに遅れ、しかも、出来映えも不満足な点が多々あることを深くお詫びいたします。

当号は、第一号、第二号にくらべ、編集の点で若干の変化がありますので、以下、いくつかの事項を補足的に申し述べて、後記の余白を埋めたいと思います。

☆ 表題は当号から<京都大学教育学部紀要>と改めました。朝令暮改の誹りをまぬかれませんが、しかし、今後はこの表題を踏襲することになりました。

☆ はじめての試みとして、殆んど全部の教官の執筆よりなる特集、<教育学について>を掲載いたしました。これを試みた趣旨は本文中の付記で申し述べておきましたが、諸賢の御高評を賜われれば幸と存じます。

☆ 従来、各種の紀要をみるに、卒業生および学生諸君の研究発表に対して与えられた紙幅はきわめて僅少であるか、もしくは、その掲載の機会はごく稀なるものがあります。そこで、当号より、相当の行数を卒業生および学生諸君の論文にあて、また、発表の機会が今後ともますます豊かであるようにと企画されております。

因みに、助手および学生諸君の論文の執筆者を簡単に紹介しておきますと、笠尾雅美（助手）遠山順一（助手）岡本道雄（博士課程） 島瀬

稔（博士課程） 稲葉宏雄（博士課程） 柴野昌山（修士課程）です。また、文献抄録の執筆者については、清水俊彦（修士課程） 寛田知義（関西大学助教授） 富士貴志夫（修士課程） 藤本浩之輔（修士課程）です。

☆ 先輩の皆様の御協力により、<京都大学教育学専攻卒業生著作目録>を一応まとめることができました。この場所をお借りして厚くお礼申あげます。この目録は終戦後のものに限られており、また、卒業生にして当学部教官の分は除かれております。いろいろ不備な点がありますが、漸次充実に参りたいと思っておりますゆえ、当号に掲載後の御労作がございましたら、逐次お知らせ頂きますようお願いいたします。

☆ <講義題目> <卒業論文題目>は、第一号、第二号とも、紙幅の都合で載せることができませんでしたので、今回、当学部創設以来の分を一掃してとりまとめました。この執筆については、八木事務長および事務職員の皆様の手をとくに劳わしました。

☆ <英文要約>については、ハリス氏および永井道雄氏に、全体の朱筆、編集および部分的執筆をおねがいし、ハリス氏御帰国後は、ポーディン氏に校閲の労を願いました。また、池田進氏、小田武氏の御援助も負っております。

☆ 最後に、校正その他雑事には安原宏君、竹中紳策君、およびその他の諸君が応援して下さいました。
(高瀬常男)

昭和32年3月25日印刷

(非売品)

昭和32年3月30日発行

著者並
発行人

京都大学教育学部

代表者 八木 節

印刷所

山代印刷株式会社

代表者 山代多三郎

京都市上京区寺之内通小川西入

発行所

京都大学教育学部

京都市左京区熊野

Kyoto University Research Studies in Education

Volume III

Contents

The Educational Function of Beauty (I) <i>Masaaki Kōsaka</i>	1
The Factor Construction of the Social Maturity Test <i>Seiichi Kuraishi</i>	22
A Historical Study of Union Catalogue Proposals in Japan and the Problems of a Japanese National Union Catalogue <i>Chikao Ogura</i>	42
Special Section : On the Study of Education	67
The Educability of Virtues <i>Masami Kasao</i>	114
The Authoritarian Personality and Parent-Child Relationships <i>Jyunichi Tōyama</i>	124
Freedom and Love in Education <i>Michio Okamoto</i>	139
Some Experiences with Play Therapy and its Problems —A Study of Play Therapy : Report II <i>Minoru Hatase</i>	149
Dewey and Marxism <i>Hiroo Inaba</i>	167
Some Studies of Deviant Behavior and Social Control <i>Shōzan Shibano</i>	180
Book Reviews <i>T. Shimizu, T. Toita, K. Fuji & K. Fujimoto</i>	190
English Abstract Eds. <i>M. Nagai & Frederic P. Harris</i>	230

The Faculty of Education, Kyoto University

March, 1957